

現在國民となり、又將に國民たらんとしつゝある庶民は、其が自己の存在を要求する時、其自らに斯る分散せる員子となることが明かにされる。然し、若し其が權利無くしては爲し得ないならば、彼等が満足する他の國家との結合より彼等を強制的に分裂せしむべき權利を有しない譯である。

然れど國民性は政治的發展中最高の限界ではない。人間性の發展は、單り庶民の自由なる發現及競争のみならず、高級なる統一に於ける是等庶民の結合も亦、一個の必須條件として要求する。法律は庶人の特殊性よりも、多く人間の性情に依つてをる。文明國民の發達せる法律は國民の慣習に依るよりも、多く人間交際の要求に依つて決定される。國家てふ眞性なる制度は幾種の國民に於ても同様である。其の最高理想とは人道に依つて基礎附けらるべき國家の最高理想である。

(But Nationality is not the highest limit of political development. The development of humanity demands as an essential condition, not merely the free manifestation and competition of peoples, but also the combination of these people in a higher unity. Law rests more upon human nature than upon the peculiarity of peoples. The developed law of civilized nations is determined more

by the requirements of human intercourse than by national custom. The essential institutions of the State are the same in different nations. The highest Ideal is of a State which should be based upon humanity.)

註 最高の國家觀念は人間的である……die höchste Staatsidee ist menschlich

而し民族的國家は幾多の國民性を包含する又國民性の上に判然と根底を有する國家でさへ、外部の要素を包含することに依り、多大の利を得る。即ち他國人の文明との公開的接觸を存續するのである。斯の如き混和は貴金屬に支持力と時價を與へる合金として役立つかも知れない。

若し國民が大體に於て一般國民性の上に根底を有するならば、其は他面に於て國家の統一に對し大なる利益である。

而して之れに他の要素たる人種例へば露西亞に於ける獨逸人、普魯西に於けるスラヴ人、獨逸に於ける猶太人及び北米に於ける佛蘭西人等を對比せしむることは無意義である。又、若し國民が權力及び重要事項に於て、相互に勝を争ふ數個の庶民より構成されてをるならば、國民の統一を確立し、且つ維持することは大に困

難である。英國は第一にサクソニヤ人とノルマン人、次に英人と蘇蘭人、最後には是等兩者と愛蘭人とを結合することに依つて此の難事に打ち勝たねばならぬ。

一國家が異なる國民に依つて成立し、其の全體が一個の國民を形成するならば、政治的權利は國民に依つて等分され得ないのである。而して政治的社會同一の法律、權利、利益を有する(及び權利の平等は皆同様に享有さるべきものである)。

(Eotvos, Die Nationalitätsfrage, Vienna, 1865)

庶民が國家を構成するに如何程聰明であり且つ價值あるかは、國際法の不完全なる状態に於ては如何なる人の判斷に依るも決定され得ずして唯だ世界史に於て發見されたる如き神の審判に依つてのみ決定され得るのである。國民が其の要求を正當に主張し得るのは、概して大争闘に依り、國民自身の損害及び其自身の所爲に依るのみである。

(How far a people is able and worthy to form a State, cannot be in the imperfect condition of international law decided by any human judgement, but only by the judgement of God as revealed in the history of the world. As a rule it is only by great struggles by its own sufferings

and its own act, that nation can justify its claim.)

若し、國家が國民の體現として、其の部分を充實せんとするならば、其の法律及び制度が國民の受容力と要求とを尊重せねばならぬことは明白である。一言以て盡せば、國民的であらねばならぬ。國民の特殊的品性を無視し、又國民の精神及び思想に相應しない組織は不自然なる無能體である。若し、其が外部の力に依つて國民に強制されるならば、或は、我々が過去に見た如く、偉大なる政治熱に浮されてをる時代に於て、其が病的なる指導を誤まりたる國民に依つて撰擇されるならば、其の權力が弛み將た國民が其の理由を發見するや否や、直に、其は再び腐敗するのである。蓋し、是等兩點の何れの場合に於ても、政治組織に對する損害は甚しいのであるから、其は國民の衰亡を來たし、又些くとも永い間に其の氣力を剝奪するのである。

國民及び國家たることに適する凡べての偉大なる國民は、其の政治的見地と國家としての特殊的分掌とを有してをる。是れは、國民が國家に國民固有の品性の銘刻を與ふるに非ずば、満足され得ないのである。是れは、國民的憲法 (Volkshumilis

ehe Verfassung)に對する國民天賦の權利を意味するものである。斯くて、憲法の異同は神より與へられてをる國民及び國民の才能の異同に相應する。

然し、國民の特殊的品性が全然國家に於て反射されてをらないと云ふことは道理である。國民は發展の變化しつゝある範圍に生活を伸張する。而して其は本然的に同様に存在するけれ共、尙ほ國民の要求及び意見は生活の時期に伴つて變革する。國民的及び一般的國家は、其の組織を國民の連續的發展體に對して適應せしめるが、其の同一性を全く失ふ事無くしては爲し得ないのである。羅馬の國家は其の多種なる變化を通じて羅馬市民の品性を發見した。而して國民の生活に於ては帝制、共和制、帝國と異なる状態を時に應じて出してをる。然し、全體に於て、我々は羅馬の判然たる刻印を見るのである。チューダー王統の英國君主制はハンノーヘル朝の君主制と異つてをる。何となれば國民は第十七世紀と第十八世紀との期間にて發展を遂げたからである。是れは、其の政治組織を時代に適應せしめんとする國民天賦の權利を意味するものである。

總括すれば、國家の形式が體現されたる國民の特殊的品性と發展期に相應する

ならば、國家は自然的であると云ふことになる。

Note:—1. Cato In Cie. de Rep. ii, 21: 'Nec temporis nihil nec hominis est constitutis republicae.'

2. Frederick the Great, Anti-Machiavel 12: 'Tout est varie dans l'univers; les temperaments des hommes sont differents et la nature etablit la meme Variete, si j'ose-mexprimer ainsi, dans le temperament des Etats. J'entends en general par le temperament d'un Etats sa situation, le nombre et le genie de ses peuples, son commerce, ses coutumes, ses lois, son fort, son faible, ses richesses et ses ressources.'

3. De Maistre, Considerations sur la France, ch. 6: 'Mais une constitution qui est faite pour toutes les nations, n'es faite pour aucune; c'est une pure abstraction, une oeuvre Scholastique faite pour exercer L'esprit d'apre's une hypothese ideale, et qu'il faut adresser a l'homme, dans les espaces imaginaires ou il habite.'

4. Napoleon to the Swiss (1803): 'Une forme de gouvernement qui n'est pas le resultat d'une longue suite d'evenement, de malheurs, d'efforts et d'enterprises de la part d'un peuple, ne

*prembra Jamais reine.*

5. Sismonde, *Etudes sur la Constitution des peuples libres*: (Introduction, p. 38.)

6. L. Ranke (*Zeitchr*, i. 91): Our theory is that every nation has a policy of its own. But what is the meaning of this principle of national independence which penetrates all spirits? Is it merely that no foreign Judge must sit in our cities, and no foreign troops march through our land? Is it not rather this, that we must develop our own mental powers independently of others, to the full extent of which they are capable? (There is an interesting chapter on 'Nationalities' in Laveleye, *Le Gouvernement dans la democratie*, Livre 11. ch. iii.)

## 七 復興期に於ける主權

近代政治思想及び活動に於て、獨立國家が互に拮抗し合つたのは一個の統治的動因力にあつた。各國家は其の自由と十分なる發展とを熱望してゐる、而して其の對外政策は現存せる國家的團體間の權力を調整する事である。

此の事實は文物復興の諸相を參考することに依つて只管説明し得らるゝ情形である。神聖羅馬帝國と中世歐羅巴の統一は漸次法律家の心意より衰滅した。實際家達は、理論家が新理想の陳述を供給し得ない中に、單純なる歐土の概念を永く除去したのである。幾多の獨立政府は長年月に亘つて、英國佛國、イスパニヤ、獨逸及び伊太利の諸部分等に建設されて來た、併し、夫れは、一切の明晰なる概念が歐洲新興諸國家の要求として現はれない中の事であつた。法律家は最早や理想として存在しなかつた歐洲に就ては唯だ口先の御役目だけを續けたのである。然るに、益々歐洲を精微に研究する様になつて來た。

而して遂に新しき理想が判然頭角を現して來た時、其の理想は主權の教義となつたのである。此の言葉は夫故、我々が文物復興より承け繼いだ政治的遺産の象徴として採用されるのである。併し、其は最も廣き意味に於て使用されねばならない、と言ふのは、其は兩個の概念を包含せしめられねばならないからである。然らば、其の兩個の概念とは何であるか、即ち(一)は一般的には君主制の形式に於ける獨立既存の政治と云ふ概念、(二)は人々の各分離せる團體は其自身の差異的發展が許さるべきであると云ふ意味を包含する民族主義の情操の始原である。蓋し、我々は獨立國家の復興期に於ける理想と民族主義の近代的概念との間に存する一切の細かい對照を今は取り去るのだ、また我々は、此處では最初國家に就て論ずるだけで國民に就ては論じない、そして其の參考となるべきものは法律及び政治の區別であると云ふことを理解せしめ、人種、言語及び傳説等の參考を理解せしめようとは爲ないのである。

### 近代政治學の理想

近代政治學は多く主權に關してをるものである。其の意味は第一、既存の政府を有する國家は平等だと云ふことである。先づ第一、其は中世紀の大君主なる概念を放棄することである。獨立國家は何れも、如何に他の國家より大なる領土を有し、將た權力に於て優るとも、自國がより低き階位にあるとは豫期しない。各國家は其の内部の諸事を處理する限り、絶體である。また、各國家は或る中央政府に依つて統治されるのである。此は遂行されたる事實なるのみならず、亦驚嘆すべきものであり、且つ發展さるべきものである所の地位なりと確信されんとする。而して何人も今や、例へばダンテの謂つた如く、幾多異なる國々に於ける法律及び政治は判然區別され且つ相異してをると云ふ事に反對を言はない。と言ふのは文明なるものは幾多異なる政治の發現に頼るからである。

夫故、國際法と云ふ概念が生ずる、而して此の國際法なるものは國家間の關係を處理するものにして、國家が他の國家に命令を強制するといふやうな優越せる權力を何等包含しないのである。斯の如き法規は一般に生起する事に關する陳述若くは驚嘆に價し又、殆ど無效の抱負に關する陳述を蒐集する以上に出でゐない

のである。併し、近代政治學に於て、我々は、如何なる文明國家も爲し得なかつた或るものが存在する——些とも、他の文明國家に關しては、と云ふ感じを喚起することを得た。斯る國家間に於ける一切の戰爭を限定する人道も、實際には野蠻未開の者供を統治する迄に手を伸ばし得なかつたのである。而して、政治的情操は發達するけれども遲鈍である、それに此の事實が文明國家をして野蠻人に對して同様に野蠻的に戰爭を爲す迄に墮落させたといふことを感ずる者は殆ど無いのである。乍併、我々が或る場所で計畫を立て、臆氣とは言へ、國家は忠實に條約の義務を固執し、以て近代獨特の模範的戰爭を爲さねばならぬと云ふことを感じてゐるのは大なる所得である。大體に於て、我々は、一切の國家は斯の法規に拘束されると云ふことを想ふ、そして國家を強制する權力は何處にも存在しないのである。

更に又、諸外國の政治に於て、我々は區々別々に稱んでゐるが、權力の均衡に適應する何ものが維持されべきだと云ふことを常に想像するのである。そこで、國家が他の國家と、依然として理論的には平等であるとも、若し、或る一個の國家が餘に權力を有するやうになつたならば、其の國家は自由に活動せしめないやうに他國

の發展に非常に影響を及ぼし得るのである。理論上の獨立は、其の國家が自己の意志を實行する眞の權力を含有してゐないならば、價值なきものである。されば、若し、或る一個の國家が軍事及び經濟に於て最高なるものと爲らんとするならば、如何なる國家も實際には自國の考へ通りに自治を行ひ得ないであらう。併し、實際的侵略將た征服を全く離れて、歐洲に於ける一個の優勢なる權威力が地方的分화를妨止するだらうと思はれる。

各主權國は他のすべての主權國と平等なる關係を所有すべきである、と云ふ事、各主權國は自己の方針の上に自由なる發展を爲すべき事、隨つて他の如何なる國家の獨立をも脅かすが如き權力ある國家は存在すべからざる事、是等は現在の理想である、政治家は現狀を維持し、以て其の發達を期するのが、依然たる理想的理由である、而して其は普通投票者の推定に入るのは甚だ困難である、けれ共、外國の支配について臆氣なる恐怖を抱き、法律及び政治に關する自己固有の型式に對する完全なる安定を希望するやうになるのである。

## 過去に於ける主權の理想

一八六

此の理想若くは指導概念の意味を發見せんが爲めには、我々は理想及び實踐の中世紀の系統が衰頽しつゝあつた時期に歸つて一度反省しなければならぬ。此の事實は急激なる變化をしたのでなく、遅々として殆んど無意識の發達を遂げたのである。假令、文物復興期の哲學者輩が迫り來る思想革命を知つてゐることも、また人道主義學派が文明の明らかに進むに伴れて生起する重要事項を彼等自ら確證しないとも、更に、開拓者達が新世界を發見するとも、歐洲民族の完全なる分離を統一せんとする臆氣なる抱負に依つて支配されたる人種的區別より生ずる偉大なる政治的變化は一般に意識されてをらなかつた。そして其の變化が生起しなかつた以前は、何人も其の方向を眞に意識してをらなかつたのである。そこで、唯だ政治的思想家達が新理想を陳述する際に起る既に遂行された事實に對する口實を發見せんとする企圖に於て意識してゐた許りである。

先づ第一認識しなければならぬ事は主權國といふ法律上の語に於て體現され

たる國家の判別である。即ち、政治家や法律家は政治的自治團體といふものが存在し、其の相互の關係は封建的でなく、且つ中世帝國の理論に従つては説明し得なかつたといふ事を許容しなければならなかつた。

斯の如くであるから、幾多團體の利益が異つてゐたのは分割的主權の理想に對する基底であつた。併し、團體は統治さるべき臣民と殆ど同様に考へられてゐたのである。

幾多の國家は夫等の接合を整頓せんとしたが、未だ誰しも、國家は人民であつて、政府の役人ではないと云ふことに訝念を抱くやうに見えなかつた。法律家は國家は帝王なり、然らずんば些とも既存の政府なりと推定してゐたのである。

近代に於けるが如く、民族主義の理想は國際法學者に依つて部分的に説明されてゐたに過ぎない。夫れは國民と國家との區別に餘り注意を拂つてゐなかつたためである。此の區別は依然として重要なものである。其は其の起原を文物復興に置いてゐた。而して其の當時も亦同様に過去の獨斷的區別を傳襲してゐたのである。隨つて凡べての國家が國民性の自然的區別を許容するに至る迄、政

一八七

治家の頭腦を惱まさんとするのである。

概して言へば國民は自然的發達を遂げたものである。其は家族の集團であり、然らずんば同一なる傳統を有する個人である。併し、國家は一個の組織的政府で

註 國家は亦勿論自然的に發表したものであるが、忽然として建設されることもある。夫故、國民を作るためには幾多の星霜を要する。

ある。されば、國家は組織的國民であるけれども、國民は其自らのものに非ざる國家といふ一個の組織體に從屬するといふことは明瞭である。斯の如きは國民及び國家の區別に關する近代の概念である、然れど、斯る區別は復興期の思想家輩及び幾多の被治者に取つて不可解であつた、彼等は思想家に依つて指導され、政府の役人に依つて統御され、尙ほも自己の政治を爲さんとする一切國民の權利と獨立なる一切政治の權利とを識別し得なかつたのである。夫故、此期の主權なるものは國民の理想といふよりも寧ろ國家の理想であつた。併し、其の内に、近代民族主義と云ふ國民的理想を暗に包含してゐたのである。

註 是れは判然と述べられてゐないが、Polandの Factors in the Modern History の内に含まれてゐる。第十四世紀が英國民族主義の第一期であると云ふのは確に時代錯誤である。

(Julia, p. 222) 併し、恐らく英國は偶然に主權と民族主義とが結合したものである——幸福なる機會。

是れは國民的情操を毫も存しなかつたといふ意味ではない、第十四世紀の英國及び佛國には明かに存在してゐたのである、然し、此の國民的情操は既存の王朝政治及び國家の主權を支持せんとした、而して其は被治關係の意志に依る政治を表現しなかつた。

### 事件に於て體現されたる理想

中世時代の後半に於て、歐洲文明の判然たる集團は十分明瞭になつた、尤各集團の獨立主權に關する教義は未だ存してゐなかつたのである。Boniface 第八世が英國の法律と佛國皇帝の軍事的活動に依つて、世界的權力を贏ち得んとする企圖を妨げられた時、新しき勢力が政治上に生起したのは明白であつた。英國と佛國の

Boniface 第八世が企てた地方僧侶の課税に英國及び佛國が抗議した事、一三〇三年九月八日、Innocent 於にける最後の悲劇是等を參考すること、

政體は、判然と別れてゐた、其の實體は其自らの生命を抱持してゐたのである、更に、



羅馬教會は Avignon に在り、羅馬法王が佛國皇帝の直接勢力下に在つた時、紛争は、馬法王の普遍主義と新興佛蘭西との間に生じつゝあつた。と云ふのは佛國が中世紀の羅馬教會の威勢を殆ど奪つてゐたからである。そこで、西部の schism は從屬

註 諸の僧侶輩は佛國皇帝の命の下に動く Avignon 羅馬法王に壓迫されてゐた。

した、伊太利は法王のために佛國と戦つた、然るに新興國は味方した——羅馬法王のために爲た英國及び獨逸、Avignon の法王のために爲た蘇格蘭及び佛蘭西斯の如き事件は、力を得つゝある幾種の政治的集團の意義を表はすものである。

我々は後半中世紀の歴史に於て見出さるべき局部的主權に關する一切の例を引用しない。佛國皇帝は、封建貴族を除かんとする一般的な殆ど全國民に受け容れられる情操を用ひて、間も無く權力ある中央政府を設立したのである。中世紀

註 善く秩序立つた國家と賢明なる君主及貴族達を失望させないやうに又、人民に満足を與へるやうに注意を拂つた。佛蘭西に於ける最善の秩序的時代は「第一の善なる制度は議會である、貴族の野心を知つて王國を建設した人は一言だに口にすれば、夫れが彼等を抑制するに必要になると考へた時である……Machiavelli, prince, ch. ix.

主權の最善なる状態は佛國に於て達せられた、其は、ルイ十四世の場合に於けるが

如く、國家が國王と同一となり得た時である。

然るに、同様な状態が十四世紀と十八世紀との間の英國史上の出來事に依つて記される。國家的情操は、極めて原始的様式であるが、Edward 第三世と Henry 第五世の下に、外國に對する戰鬪的地位に依つて作られた。而して一個の根柢と

註 此の事實は Pollard の *Factors in Modern History* 中に能く述べられてゐる(一)國家の主權 (二)國家の獨立、一七八二年

して斯る國家的情操の上に、チユードル王朝は一般人民の政府でもなく又、中央政府でもなき即ち中世紀主權を設立したのである。彼の Armada の挿話は恐らく國民の熱情を湧かさんとする一個の機會のためであつたが、是れは、狡猾なる王朝政治家に依つて、個人的主權の支持に速かに變形されてしまつた。而して遂に獨立集團の概念の眞價が現はれる迄、一六四〇年自り一六八八年に至る迄の個人的主權の概念を除き去つたのである。

イスパニヤに於ける形勢は比較的困難であつた、と言ふのは都市及び地方領主の中世に於ける生活に加ふるに Ferdinand 及び Isabelle の中世的主權の面前に外國

人種及び異國の政治が現はれたからである。集團の統一は何れの國よりも容易に君主の單一なる支配に頼つてゐた。イスパニヤの國家的發展はナポレオン時代の現はるゝ迄非常に紛糾してゐた。

伊太利に於て、中世紀主權は幾多小さき地方的政府を生じた。夫れは同一人種、言語及び傳統を有する人民が集團に分離したのである。獨逸に於ても亦同様なる傾向があつて分裂體を生じた、夫れは非常に優勢に戦ひ、宛もナポレオン時代の如く易々と外國に勝ち得た所のものである。Augustine の *Cuius regio eius religio* は各國家は夫れ自らの宗教と云ふ形式を撰擇すべきであるとの意に非ずして、各管區は其の支配者の宗教を採用すべしと云ふことを意味した。

註 一五五五年に於ける此の標語は有名になつた。是れは Hugo Grotius の *regio* の使用を注意すること、其は *regio* と *territory* を意味せずして *Kingship* を意味するのである。

是れは統治關係の利益でなく、地方君主の利益のために考へられたことである。されば十八世紀の英國及び佛國が幾多の國民を統一したのに、獨逸の國家は幾多の州に分れた。斯くて中世紀主權は半ば地方的、地理的或は人種的管區の利益に

する有效なる訴となり、半ば、獨斷的非地理的且つ非人種的王朝の下にある分裂體に對する歴史的口實となるやうに思はれる。

### 中世紀理想の解説

吾人の説論に従れば、蓋し實際に起つた事は或る意味に於て政治的要求を充たすといふことから來てをらねばならない。理想は我々をして考へさせた限界的形式に於てさへ、中世紀復興主權を存置した動力の一つであらねばならぬ。併し此の主權が決して、集團の現實的主權としては考へられなかつたと云ふことは明らかである。また、復興期の帝王及び貴族達は彼等の臣民の意に依つて自分達の地位を保持せんと自信してゐたと云ふことを高調せずしては、前掲の主權存在は不可能である。

然らば、如何なる意味に於て、統一を企圖する中世紀の希望に代へ、新理想を立てることに依り、政治的要求が充たされるのであるか。而してその供給されたる要求は一定の權力あるものゝ要求である、即ち中央政府であつた。更に人々は其の

國をして地方貴族の休む時なき争闘より自由ならしめんがために、彼等が要求せんとする一切の權利を彼等の王侯に進んで與ふるに足る状態に在つた。従つて、其の當時、統一に關する中世紀の概念は事實政治的權力が非常に細かに分割されてゐたことを認めて差支ないのである。而して、終局其の時代の權力が直接神より來つて一個の人間即ち帝王に歸すると信せられてゐたのに、事實、實際的なる政治的權力は無數の地方貴族に依つて支持されてゐたのである。夫故、統一に向つて、無意識的に集團化せんとする一つの言語と傳統によりて結合されてゐた人々は自由の分割に反對せんとするの自覺を持つたのである。帝王若くは彼等の宗族は貴族の激争から永久に通れることを爲し遂げるための器具と認められてゐた。例へば、英國チュードル王朝の統治時代には *War of Roses* といふ難事が伴つた。佛蘭に於ては、*Machiavelli* が考へた如く、帝王は貴族に反對せんがために人民を使用した。

然らずんば、吾人が論せんとする如く、人民が無意識的に帝王を使用したのである。伊太利に於ても亦、*Medici* や他の專制君主は、黨派の絶間なき亂争に代ふるに、

些とも一定の政府を設備せんとするの要求を眞實充たした、然れど、吾人は、幾多の人々が地方的統治機關を設け、又彼等自ら不統一、及び自由争闘より遁れんがために帝王若くは是等に類似する者を備ふべく賛意を表するとは言ひ得ない、此の過程は殆ど無意識的であつて、其の要求に依つて貴族の戰將た黨派及び事情の抗争がある場合に、人は實際迷惑したといふことが感せられた。封建領主の時代に於ける偶然的權力將た、一黨派の偶然的成功は是等抗争の解決を促進せしめた。其處に地方の中央政府が出來た、そして是等は發展に價するやうに思はれた。幾多の人々は、彼等が帝王主權に全く服した時、何程迄其の服従を捧げたかを告げられたとすると、實際に夫れを認識することを得なかつた。吾人が目撃する如く、夫れは彼等の凡べてを捧ぐべき權利であつたと思家達は彼等に告げたのである。今や吾人に取つて、被統治的集團に依つて爲された完全なる權力割讓を賞讃せんとする佛國革命の影響は餘りに迷惑過ぎたのである、併し、復興期の經驗に於て、帝王の主權を如何なる限界まで強制したかといふことは、未だ示されてゐなかつた。夫故、其の歴史は國民の權利及び一般民衆の感情に逆つて設けられた暴逆なる帝

王の歴史ではない、そこで、文物復興を論せんとするには Rousseau の非常に限られた認識に還へるべきである。而して吾人は最も絶對的な専制王者ですら人民の要求を適へたといふこと及び彼等は貴族と黨派の不一致のために、合理的に設けられた代表者として承け容れられてゐたといふことを認めねばならぬ。此の理由で、中世紀帝王の神聖なる役目を務めし分子達は、理論に於て復興期の王公に用ひられてゐたのである。従つて、吾人は「帝王の神聖なる権利」の精巧なる證を聞かんとした。帝王は神より統治の役目を委ねられた。そこで地方の帝王も亦同様なのであつた。併し、神權政治の理論も亦多く同様な論據で殘存してゐた。夫故、皇帝の勳章も亦地方君主に依つて繼承された。宗教組織に關係ある中此王者の

註 地方の帝王に依り支持されてゐた *hall* や *globe* は何の意味も有つてゐない、夫れが一度神聖羅馬帝國に依つて支持された時、其は全世界を統べる主權の意味を有つた、

cf. Raskulphus Glaber, *Chronicon* I, f, sect. 23.

附 the purple of the Caesars

曖昧なる地位は英國の諸王及び獨逸の諸侯に依つて採用され且つ發展せしめられた。

目様に一個の血統、言語、及び傳統に依つて形成された集團内に於ける局部的差別の存在から生ずる惡弊は十分明らかであつた。而して、朦朧たる希望が中央政府と云ふ或る形式に於て存在してをつた。併し、復興運動については今一個の方面が殘されてゐた。夫れは、政府は權力を強うし、中央集權をなしたのみならず、其が絶對となり、隨つて此れが様々なる獨立國家を生じたことである。何が故に、歐洲は復興期に分裂し、統一されなかつたのであるか。其は半ば、教會及び中世統一の帝國が地方政治の強權を侵掠せんとしたが故である。此の中世帝國は政治的

註 Figes, *Gerson to Grotius*, P. 15. For the subject of this Chapter as a whole see also

Figes, *The Divine Right of Kings* (Publ. 1893), 2nd. ed. 1914. with three additional essays.

に弱薄であつたが、此れに附隨する赤裸々の理論は地方の侯主を弱はめんとした。而して、教會の國家組織は政治上、地方政府の權力運用に實際干渉したのである。隨つて、其は必然的に政府の權力を弱めんとする此の組織を打破せんとしたのである。

夫故、獨立主權を絶對的に平等にせんとする運動は半ば宗教的であつた。而し

て、新しき教會組織は新しき政治的觀念の表現を伴ひ且つ其を支持した。宗教改革及び種々様々なる宗教の建設は實に幾多異なる國家の建設に影響を及ぼした

註 Lutherは其の政治論に於て、現世的主權へ、爾來主に僧侶の特權となつてゐた神聖の御光を移入した(Figs. op. cit. P. 81) 自論 Luther及び Calvinの政治的理想の反映を論ぜんとする所まで進めないのである。 Cf. Troelsch op. cit. P. 724 et seq.

のである。併し、政治的理想の理由を發見せんがために政治的惡弊を見越すと云ふことは、自分の現下の目的には必然でないのである。佛蘭西に於てさへ、宗教は、加特力の名に於て殘存した。夫故、中世的宗教であつた、尤も同等なる宗教に反對した以後には、其は事實最早世界的ではなかつた。常に争ひ勝ちであつた所の加特力の教義は單に新しき信條の一形式であつたに過ぎない。而して、國家組織は絶對的、地方政治の利益を兎に角運用し得るのである。此の政治的理想は斯る道程を追ふたのである。歐洲は最早、理論に於ても、權勢を掌握しようとは欲しない。其は同等の權利を有する獨立國家を多からしめんとするに在る、斯くて單り、法律の保障と地方的政治の利益といふ效力ある觀念のみ維持され得たのである。

斯の如きは、其の時代の事件に依つて現はれた理想の印である。是等の事件は一般に多數者の未成的希望と實際政治家の限界概念の結果である。該時代の運動は判然と考へられたる目的を成就せんがために或る手段を意識的に採用することは全く出来なかつた。其は不堅實なる希望によりて導かれた不様な經驗である。併し、此の理想は、常に一個の原動力としては認識されない。然うでなければ、誤説される。

### 學究上の理想

其の時代の思想家達は地方政治の利益の分別を認めんとする努力に於て、文物復興の理想に關する今一個の説明を與へてをる。文物復興初期の學究に於て、Nicholas de Cusa 6 De Pace Fidei を此の傾向を體現してをる。此の説論は歐洲の不

註 是れは一四五四年頃に書かれた

統一に就いて歎き、幾多の國家が各異なる意見を持して神の前で、争はんがために天國の法廷へ代表者を送らされると云ふことを豫想するものである。例へば、獨

逸人、英國人、佛蘭西人、及び伊太利人等は土耳其人、亞拉比亞人と共に各々異なる意見を有つてゐる。英國人は宗教制度に反對の訴へをし、土耳其人は三位一體説に對する。Cusanus は地方政治の分野は中世紀の普遍主義宗教上を殆ど不可能にしたと認めてゐる。是れ蓋し、種族的差別に關する舊時の認識と同様な意味を包含せんとするものである。

歐洲幾多の分團の政治は事實獨立であつたが、此れは、Jean Bodin が六部の *Livres de la Republique* を一五七七年に表はす迄、理論上の證明をなは表はさないのである。此處で説明された政治の概念は細目に亘つて論せられない。其は半ば傳統的にして、半ば觀察したる事實の理論的説述である。然し、此の著の全力は *Puissance Souveraine* と云ふ言葉を説明するに集注されてゐる、我々は、國家の目的が明かになると、從屬集團が存在すると云ふことを學んでゐる。

1 (Book. I, chap. 8) 'Il est icy besoin de former la definition de Souverainete, Parce nul n'y a ny Juris consulte ny philosophe Politique qui l'ayt definie; iacoit que c'est le Poinct Principal, et le Plus necessaire d'etre entendu au traite de la Republique; 主權の概念は、蓋し其の

註 之れを定義して *Republique est un droit gouvernement de plusieurs et de ce qui leur est Commun avec Puissance Souveraine*: と曰ふが、ボダンに Plato & Thomas le More の如き理想を説述するのではないとの説明を加へてゐる。

意味を論せんとする章に於て使用されるのである、全體から言へば、主權は二個の要素を包有すると云ふことを學んでゐる。第一は「主權」を有する組織的集團は獨立にして、同等の價值を有すと云ふことである。ボダンは斯る考へ方の説明を以て、其の理を明らかにせんがために、絶對的に獨立なる政府は存在し且つ其は善と認められてゐたと想つてゐる。

彼は地方的主權と舊時帝國の主權との對照を理解する。乍然、彼は文物復興の様式に於て、帝國を以て、幾多の平等なる主權中の唯一なるものとするのである。

素約を作さんとする國家に對して、當時認められてゐた權力は帝國と獨立なる數

註 *L'Empereur ne s'attribue pas aussi la Souverainete sur les Princes.* (P. 94)

個の各別なる國家の主權を含むのである。  
彼は希臘人は唯一個の主權のみが存在したと主張し、或る者は瑞西の地方政治區は一個の國家にして、十三の分れたる主權を有つてゐたと誤つて主張してゐる

と曰ふ。併し、此れは、増進し發展さるべき善としての文物復興に於ける政治生活の新しい特徴の一つを認めんとする。

第二に主権は絶対的にして且つ恒久的なる権力である。此れに依つて、ボダンが地方有司、市民、同胞等を従属せしめんとするの當然を暗示せんとする、此の目的に對して凡べての組織的集團は存在するのだ。此の権力は一個の人間の掌中に存在すると看做される。尤も、其は、理論的には人民議會と共に安立してゐる。國

註 *En l'estat Populaire ou la souverainete gist en l'assemblee du Peuple.* (P, 150)

家の主権は正に條件の殆ど微些なる變化に依つて君主の主権となつてゐる。夫れは或る一定の中央集權の理想を復興的が體現せるを意味するものである、而して、弊害なるものに反對して此の概念が主張されたことを知るには容易である。地方村落の法律及び貴族の政治、封建制度の傳統を承継し集國民の幾種の慣習及び利益は其を一個の絶対的優越なる中心権力を文明生活眞個の基礎としてより能く豫想せしめた。

主権の記號は何等高級なるもの及び同等なるものの承諾なくして法律を制定

するの権力である。而して此の権力の下に平和と戦争の権力が含まれてゐる。

*There is nothing greater on earth after God than Sovereign Princes.*

人民が時に英國に於けるが如く相談し合ふと云ふことは主権に取つて何等の問題ともならない、また實に、緊急なる要求が起る場合には、君主は人民の相談を待つべきものではない。

主権に於ける二個の要素について、ボダンは主に、國家の内部的調整を進めんとするやうである。Hugo de Grootの後著は主権の第二要素を最も明瞭に表はしてをる——數個の主権を有する所謂自主團體の平等性及び獨立性。Du I vre Pelli et Pactisは歐洲國家組織に於ける非常なる進歩を印るしてをる。併し、此の理想は其の時代の理想にして其者獨りの理想ではない。

此の論争の些細な所は論ずる要がない、夫れは、自分の目的は主権國の概念は如何にして建てらるゝかを示めさんとするのみだからである。而して、此處では、他の理想に關する場合に於ける如く、二個の陳述が含まれてをると云ふことが認識される、第一に、個々の主権國は *de Groot* に依つて實際に存在するものととして認識

される。次に、彼は斯の主権を支持し發展せしめんとする。此の著は法律家が形式的に考へた所の陳述に始つてをる。

(一)凡べての人々に普く通ずる法律、(二)各集團に對して特に定められたる法律、併し、誰れしも未だ集團對集團の關係を考へなかつた。是等の關係は文物復興期に於て現はれたる如く一般に戰鬪的である、然し、彼は各集團は他の集團を要したと考へた。

最高なる政治的權力は他の如何なるものの法律の適用を受けざる行動を爲し得る權力として規定されてをる。斯の權力は國家の自主權を作し、其は *Civitas* と稱ばれ、更に其は「恒久的集團」となる。

註 *Summa* (*Potestas civilis*) est cuius actus alterius iuri non subsunt. I. ch. iii. 7. 1.

註 I. *ibid.* *civitas quum perfectum coetum esse diximus*

我には此處で人間の各集團の分權論を試みたが、著者は主權が「人民」に存在すると主張する人々に反對せんとする。未だ、彼は或る者は人民は帝王に辯明を要求することさへ出來ると考へたと曰ふ、併し、夫れは不條理である、何故ならば、各集團

は政體を自由に撰らんだか、それとも其の政體を優勢なる力を有する者より受容したか、是等兩者の限界を出でないからである。

此等兩者何れの場合に於ても、政府として建設される事は問題たり得ない。現存せる「人民」は假想的に撰擇せる國家と同様なる國家である、而して、其の撰擇が一

註 II, ch. ix. Par. 3<sup>a</sup> *Civitates sunt immortales: that (ch. iv) they may be conquered or (ch. vi) the group may have the rights taken away.*

度で爲された曉は絶對的に拘束する、それは丁度、婦人が確と夫を撰擇した時の如くで、一度で其の撰擇が爲された曉は、夫れは、何處までも従はなければならぬと一般である。

此處には人民又は國民の發展と云ふ如き福音は存在しない。と言ふのは、集團は分立政府の基礎として單純に考へられるからである。政治は勿論被治者の幸福のために存在してゐる。併し、唯だ保護者としては保護者の利益を考へねばならぬ。而して、如何なる審判の權利も人民には存しないのである。

然らば、獨立團體將た主權國とは何であるか、人民とは相互に分化せるものより



構成されたる一種の團體である。而して其は一個の人間に從屬し、Plutarchの言ふ如く一個の慣習を有し、法律家 Paulの言ふ如く一個の精神を有するものである。人民に於ける此の精神此の慣習は文明生活の完全なる聯合であり、其の第一の結果は主權 imperium 國家を構成する所の羈絆 Senecaの言ひし如く、幾多の者が呼吸する所の活ける精神である。

Populus est ex eorum corporum genere quod ex distantibus constat, unque homini subiectum est, quod habet ut Plutar chus, spiritum unum ut paulus niris consultus loquitur. Is autem spiritus sive in Populo est vitae cibilis consociatio Plena atque Perfecta cuius Prima Productio est suum imperium, via ealum Per quod respublice cohaeret, spiritus vitalis quem tot millia trahunt ut Seneca loquitur. (L. il. 11. ch. ix. Per 3.)

實際的政體は一切の種差を作らない、夫れは最高なる或る形式に於て組織されたる國家である。又た斯る國家は存在し且つ幾多存在すべきである。

中世紀主權に關する第三の大著は Thomas Hobbes の Leviathan である、此の論議の

精細なる點は、復た論ずる必要がない。夫れは、我々の現在の目的に對して抱かれた

註 一六五一年の第一版 Graham Wallas の Great Society 第四章……ホッブスの批評、併し、彼は、ホッブスの反對した弊害に就ては餘り論調を高めなかつた。

る理想は最も興味深きものだからである。ホッブスに従れば、人間は各人互に相争ふ、けれ共同時に人間は相互保護のために同盟を作すのである。斯くて國家は自我的衝動の統制と集團の保護のために存在する。ホッブスは其の要求は強き中央政府であると感じた、而して其が終局被治者の意思に依ると云ふは第二次的に考へられることである、時代の事實は不統一と外敵に對抗するに弱力なることを示してゐた。夫故、此の理想は中世紀主權であつた。人間終局の道、目的將た企圖(自然的に自由と他を支配することを愛する)は彼等自らの上に拘束を誘導すること、に於て之れに依つて人は共和政體のうちに住息するを知る(人間自らの保存と、より多く満足なる生活とを先見するのである。即ち人間自らが Ware の慘めなる状態より逃れることである。

斯くて若し、紛争が他の方面に於て蔓延するならば、蓋し満足を得んがためには

自己の自由を犠牲にするに足る。此の包擁的理想は無秩序に流るゝ傾向を抑壓するに足る力を有する所の中央政府である。是れホッブスの考へたる所にして「自然的」なるものである。併し、我々は彼の時代の傾向が單純なることを知るのである。

此の中央集權(主權)が樹立される時、自由は主權が決定せし事物の内に存在する。而して主權は沒收される筈がない。權力が無制限であると、人は幾多の弊惡を想像する、しかし、其の權力を缺く結果は鄰人に對する恒久的争闘となつて善くない。

ホッブスの人間に對する希望は人間をして絶對主權に従屬せしむること以外に何もものもない。斯る生活は他に何等かの惡事が生起する程に悪いものではない、而して、ホッブスが考へた原始時代の野蠻主義が眞に危險なものであると人々が考へるならば、夫れは一個の稱讚すべき事である。然し、此の理想の一般概念は明瞭である。則ち其の理想は、永久に中世時代の私的争闘と復興期の休む時なき野心とを撲滅せんとする或る一定の確固たる中央政府を樹立することである。

斯くて、思想に於ても事實に於ても又結局理想に於ても、歐洲文明は數個の獨立

中央集權の府に従屬されんとした。分區及び種差は統一よりも重要なるものと思はれた、而して政治は權力の均衡となつた。

## 八 民主制と宗教

將來の民主制に關係ある宗教の觀念を包含することは一見不必要に考へらるるかも知れない。惟ふに此の意見に對して二個の理由が與へられる。一つは民主的觀念は宗教を政治より全然分離せんとすること、他は民主的感情が凡べての宗教に對する同情より循れつゝあることである。若し、第一の提唱が眞なれば第二の提唱は當然の事由として伴ふ可きである。と言ふのは其自ら重要ならざる宗教に對して重要な政治的關係は在り得ないからである。併し、宗教と政治との分離を要求することは果して民主制の精神の自然的傾向であるか否かを先づ研究しようではないか。

疑も無く民主的抱負を表はすべく最も眞實に心組んでをる多くの人々及び民主運動に最も密接なる關係を有する多くの人々は躊躇なく益々熱情を以て、宗教と政治とは將來夫等が結局相互に何等の關係をも有しない以上、より多く廣汎に

分離して行くやうになると云ふことを信じて居る。我々は此の意見が亞米利加合衆國の實例に依つて強く支持されてをると云ふことを告げられてゐるのだ。夫れは此の國で政治と宗教との分離が過去に於て非常に成功してゐたと言はれるからである。また佛蘭西の實例に依つても此等の分離は將來不可抗的だと言はれてをる。

併し、政治に於て、偶然的なるものと必然的なるものとを分別し置く事は特に必要である。其故は一時的傳統若くは、外來的偏見が動もすれば信條の永遠的及び統一的部分として誤信されるからである。夫故我々は民主制の下に於て、宗教は政治より分離されねばならぬと云ふことは一般的に考へられるか否かに非ずして、民主制の精神は果して斯の如き分離を要求するか否かを我等自ら研究せねばならない。

歴史は第一斯の如き分離を民主制の恒久的條件として期待すべく我々を導かうと爲ない。宗教と云ふ語が或る特殊の宗教に依つて作用しつゝあるか將た其れに反對してゐるかと云ふ宗教的感情を包含するを記憶せる限り、是等二個の事

例に於てすら、宗教は他の如何なる單純なる感化よりも、より多く政治的の制度に貢獻したことを認め得るのである。ピエーリタンは遠く以前北米共和制の品性を汚した。また佛蘭西最初の共和黨は唯だ他の議會を設立せんがために一個の議會を追ひ出したに過ぎない。然るに最後の議會は、其が彼等の眼前に現はれた時、宗教に對する反對に依つて最も多く支配されたのである。

蓋し過去を振り顧る時、我々は之れと同一なる原理を發見する。希臘の國家の理想は個人的利益の集合に非ずして、道德的目的の集團的高昇であつた。夫故ボリスと云ふ語は如何なる單純な普通の政治的意味よりも、寧ろ宗教即ちエクレシヤの意味を表はしてゐたのである。羅馬に於て、最高の政治的及び宗教的分掌は同一人格に於て適應されてゐた。而して希臘及び羅馬兩者に於て、政治的權力及び宗教的信仰は同時に衰頹したのである。宗教が道德の基礎に止まり、道德が政治の基礎に止まつた時、宗教は迷信に墮落し、道德は哲學に、政治は無秩序に墮落した。而して此は以降現代に至る迄、其の眞實なることを保持して來た。其を保持して來たものは、帝王に非ず、政治家に非ず、人種に非ず、實に歴史を構成する宗教である。

ある。また常に政治的地圖の主なる圖案家、變更者たるものは宗教の指である。宗教及び政治の分離より生ずる弊害は宗教も政治も共に蒙らねばならぬ。即ち政治は宗教を離れて永く存続し得ず、また宗教は政治を離れて永く繁榮しない。基督教は其の移植に依るの外、舊羅馬帝國の限界外に在る一切の廣汎なる領土に於て未だ一般的にならなかつた。然るに最初宗教を生み、多くの感化を及ぼした國に於てすら、宗教は死に去つたのである。偕て今やアボカリイブス、アレキサンドリヤ、カルタゴ等の教會管區に於て、宗教は何うなつてをるか、基督が生れたガリシアに於てさへ更に基督の死んだユダヤに於て宗教は何うなつてをるか、宗教改革の諸原理も亦、夫等が政治的權力と聯合せし場合の外決して有勢にならなかつた。

過去を試問するの結果として、宗教的なるものが政治的なるものに從屬せし政治と政治的なるものが宗教的なるものに從屬せし政治との存在したことを我々は發見する。併し其の政治に於て、宗教的なるものと政治的なるものとは時代の如何なる力のためにも分離されなかつた。是れ神が人間の切り離して置き得な

いものを結合したと云ふことを暗示してをる。

過去何處でも實現されざりしものを英國に於て將來期待すべき理由が存在するか、英國の歴史は斯の如き期待を支持しないのである。英國に於ける大政變の殆どすべては其の樞軸を宗教の上に置いて居た。我々は國家全能論なくして宗教改革を老へ得ない。またヒューリタニズムなくして革命を

註 トーマス・エラスマスは宗教は國家の支配を受く可しと唱へ、國家の地上に於ける全能性を主張したれば、以後國家の全能を説く主義を之れよりしてエラスチアニズムと云ふ

考へ得ない。將た羅馬加特力主義なくして王政復興を考へることが出來ない。而して現在英蘭蘇格蘭愛蘭に於て、思想上我々は宗教と政治とを分離し得ないのである。宗教を度外し、何故或る政黨の殆どすべてが獨立教派であり、何故自由黨の殆どすべてが蘇格蘭人で在り、何故愛蘭が他の合衆王國の如く、統治され得ないかと云ふ理由を我々は如何にして説明せんとするか。

宗教と政治とをして其の共同作用を爲さしむるの困難に厭く時、人は之れがた

めに宗教と政治とは相互に分離されると云ふ教條を立てるかも知れない。併し斯の如き区分は、其の存續の程度、殆ど人が水中に竿を挿したと同様に、瞬時のことである。自然法の原則に従つて人間は申請するが神は處理せんとする。其の一つは宗教と政治とは道德的生活の一般的根據の上に適合せねばならぬと云ふことである。而して此の根據に立つて、政治の開化せる形式は其の存立を獲得せねばならぬ。我々は爲す可き事と爲す可き方法を分離し得ない。宗教は前者を教へ政治は後者を教へる。

設令宗教的感情が政治的活動の主なる動力であるとも、此の感情が國家の範圍内に來るとは定らないと言はれるかも知れぬ。けれども、國家は感情を處理す可きに非ずして、感情は感情其自らに委すべきである。而して、國家の活動を認め國家の安寧を愛することに於てのみ、感情は感情其自らを表現するのである。

是れは疑もなく幾多異なる感情に就ての眞實であるが、宗教的感情は其を其自ら範疇の内に位地せしも特殊性を有つてをる。是等の一つは常に主に國家の理想を決定するものである。而して他は如何なる時にも國家の活動を管理するに

十分優勢にするのである。斯る場合に在つては、政治は宗教と結合されねばならない。然らずんば、國家は其の最高權を失はねばならぬ。英國の宗教改革の際惹起した問題は、國家は教會と聯合すべきか否かに非ずして、英國に於ける支配者なるものは、國家か將た教會かの問題であつた。斯る危機は確に循環せんとする。而して各々の場合に、國家は其の安寧を保つ上に優越なる要素を失はねばならぬ。夫れとも宗教と政治との間に密接なる結合を存せねばならぬかと云ふことが明白になるのである。然るに若し此の結合が破壊されるとも、斯る場合には夫れは復興されねばならない。夫故此の結合を持続することは政治的幸福の自然的法則たらんとするのである。

此の結合は特に民主制を利せんとする。群衆に依る政治は時に偏り易く、且つ忽ざりになり易いけれ共、一度び斯る事象が生起した場合には此の結合は確に仇敵を王座に近づけざるよう驅逐し又其の權力を隠蔽せんとする障礙を伴はずして干渉を避けんとするのである。如何なる政體の下に在つても、教會と國家とは相互に永久に分離し得なかつた。些くとも事實は民主制の下に期待さるべきも

ものであらねばならぬ。

民主制の理想は宗教と政治とを全然分離することを欲しないと云ふ結論に到達するに方つて、我々は次の考察即ち民主的感情は凡べての宗教に對する同情を驅逐しつゝあるか、何うかを省みなければならぬ。英國に於て民主的感情は累積しつゝあるか、また更に累積せんとするか。

最初我々は幾多の態度を考へさせられたが、終に我々は肯定を以て答へねばならなくなつた。尤も我々は次の諸事實を否定し得ないのである。新しき禮拜所が建てられること、熱心に働く宗教の司徒、及び自分達を犠牲的努力を以て支持する彼等の一味は決して他者に比して卓越してゐなかつたこと、以前よりも多くの宗教的組織が存在すること及び此等の大部分はより多く能働的なること等である。併し更に注意する時多くの事は人々のために爲されてをるけれ共、彼等に依つて爲されつゝあることは非常に稀なること及び民主制の健全なる第一公理の一つは人民は人民自らのために爲さねばならぬと云ふことを我々は知つてをる。最も一般的なる旅役者は其の崇拜者の自發的努力に依つて賞讃される。また一

方に於て、最小の義捐金は貧者の幾錢かに依つて積み立てられた。貧者は少數者より生ずる最も高價なる殿堂將た頼しき賜物のためよりも、宗教のために語り且つ盡さんとする。

此の點に就て吾人の問題は、何うなるであらうか。併し我々の告白せねばならないことは、殆ど凡べての事は極少數者に依つて爲されること及び我々は多數の教會を建つべく期待しないと云ふことである。夫れは若し彼等多くの者か他人の彼等多くの者のために建てて教會に自ら詣でようとするさへすれば、我々は頗る満足だからである。更に亦、我々は、彼等か教會に詣でようとしないと云ふことを告白せねばならぬ。と言ふのは、富者、安樂者、貧者などが健氣にも教會に詣づるのに、働きの人の多くが不思議にも欠席するからである。

併し、感化力が及ばないのは、單り出席の問題のみに止つてゐない。何故なら、其の失敗は凡ゆる形式に於て宗教的感化のうちに及んでゐるからである。宗教の多數司徒は、自分達は決して眞の多くの信仰者を適宜に有ち得ないと云ふことを悲しいかな認めねばならない。

オーヒユースは樂を奏づるかも知れぬ。けれども自分の無作法を氣にしない人々は舞踏もせず更に彼の管絃の響を傾聴せんとて止まりもしない。多くの教會管區に於て最善の勞働者が教會の何物かを修繕す可く遣はさるるとも、彼等は他の何等かの目的のために殆ど教會に來ない人間になり變るのである。他の階級に對する或る階級の眞の感情を確かめることは常に困難である。夫れは諸階級なるものが殆ど諸國民の如く別々になつてゐるからである。英國勞働者を一個の支配者として考へる時、彼等は宗教の司徒を一般に半ば嘲笑せんとする底の堪忍を以て尊重するやうに思はれる。彼等は之等の司徒を善い意味ではあるが弱者の集として重じてゐる。夫れは彼等の意見の狭少なること、彼等の行爲が非常に非實際的なること及び一般に情操と女性らしきものに傾き過ぎることを示してゐるのである。若し一個の言葉が此の感情を記述するためには撰ばれるならば「柔弱」と云ふ言葉が殆ど眞に近いものであらう。伊太利の諺の精神に於ては、彼等は善良であるが何の役にも立たないと云ふことになる。

そこで佛蘭西及び伊太利に在つた如く、宗教及び其の司徒に對する敵愾心は何

等多數者の仲間が存在してゐなかつたと云ふことを認めねばならない、而して其の障碍となるものは反對行爲に非ずして無頓着其のものであつた。婦人や兒童は感化されるが、男子は宗教を自分の仕事と認めないやうに思はれる。

併し、若し、我々が未來に就て豫言せんとするならば多くの人々が現在所有する性質を見越し、彼等の意見を作る感化を考へねばならない。此等の感化は勞働階級の思慮ある指導者たる否とを論せず如何なる人々に依つても求められるのでなく、多數者の心意を會得し、漸次彼等をして確信を抱かしむる一定の思想體系に依つて求められるのである。現在一切の通俗的聲明は其の起原を二個或は三個の單純なる推定に置いてゐる。そして夫等の聲明は若し夫等が無効に歸するとも公表されねばならない。斯くて未來は收穫が芽條の尙ほ地中に在る種子に内在せる如く現在働きつゝある誘導作用に於て見出されんとする。

宗教を論ずる限り、考へねばならぬ三個の思想體系が在る、此等は科學的、哲學的及び政治的である。此の分類は宗教の第一公理は神の存在であると云ふ根據の上に證明される、而して此等何づれの誘導作用も、多數者團體將た、一切の個人が神

の必要なることを永く信せんとするが故に、人間生活より神の存在を説明せんとする宗教には反對するのである。斯る事實を必要とする全人類の範圍は、若し宗教が今後持せんとするならば三個の部分即ち物質的、精神的、及び道德的部分に分類されるかも知れない。茲に於て科學は第一の部分を取扱ひ、哲學は第二の部分を取扱ひ、政治學は第三の部分を取扱ふと云ふことになる。若し、至べてのもの將來此等の中の或るものが神は存在し得るし、また存在するし、更に自ら行動すると云ふことを確認し得るならば夫等が理性的存在である限り、多數者に及ぼす宗教の感化は歸するところ阻止されねばならない。そこで、我々は科學、宗教、政治學が此の方向に於て將來の民主制と何處まで相俟つて繼續するかを考へねばならぬ。蓋し、二個の事象は調和されねばならぬ。是等二個の事象の中一個は宗教は主に思想に依らずして、其の主なる根柢を感情に存すると云ふことである。乍然思想が宗教に逆ふならば、宗教は永く存續し得ないのである。宗教を存續せしめんがためには、「心情」と意思とが従前通り相俟つて一個の調和せる音樂を作するのが必要である。併し我々は感情に理屈を附け得ない様に我々は吾等の注意を思想



の場合には思想のみに限らねばならない。

二二三

第二の事象は、一般科學、哲學、政治學等は勿論宗教に必然的に反對するものであるとは想像されないと云ふことである。此等のものは信仰に反對する様に考へられるが常例であるけれども、實は此等は相互に補ひ合つてをるのである。信仰は知識を超越す可きであるが、信仰が眞なる知識に反對すればする程、其の信仰は存続性を減ずるのである。夫故、一方に於て科學、哲學、政治、他方に於て科學、哲學、宗教の間に成長してをる如き反對が存在すると云はれてをる。従つて我々は此の事實は如何なる程度まで眞であるかを考へねばならぬ。

科學が神の存在を假定せずして、物質的現象を認むる限り、夫れは宗教に反對するものである。また宗教をして知得せしむる様に信せしむる教書の信頼を科學が否定し得る限り、基督教に反對なのである。然らば我々は夫等二個の方面に於て如何なる程度まで宗教を成功の境に達せしめんとするか。

第一の場合に於て物質的現象が論せらるゝ限り、第一原因の存在に於ける信條は宗教の基礎なることが了解される。而して科學は人道の自然的本能なるの信

條を破壊せんとするか。我々は特に後代に於ける科學の驚異すべき發見を十分に認めるけれ共、科學が些くとも此の信條の基底に觸れないと云ふことを認めざるを得ない。従つて夫等の發見は些くとも因果關係の終局問題を解決しないのである。科學は自然の過程に關する新知識を我々に開放してゐるが、其は我々をして夫の過程の諸原因に觸れしめない。我々は此事實が如何にして生ずるかを凡べて認識するかも知れないが、何が故かに就ては殆ど認識しないのである。夫故、假令自然の過程が人間悟性に對して赤裸々に現はれてゐても、舊世界の循環句法に基く詩は今も昔も變りなく眞なるものとして殘存すると思はれる。

何故燕麥、豆將た大麥は生長するかは  
汝も誰も知らないのだ。

夫故、多くの知識階級の人々に觸れた科學的懷疑主義が將來の民主制に多大の影響を及ぼすとは殆ど思はれない。人々の日常生活の實踐的品性は彼等の保護者となるのだ、彼等は勢力なき變化を経験しないし又原因なき結果を経験しない。夫故、假令人間が軟柔なる物の最初の班點より發展したと云ふことを人々が示さ

二二三

れるとも、彼等は更に何が人間を發展せしめたのかと云ふことを問ふであらう。又人間が最初如上の班點の内に存在しなければ如何にして人間は其の班點より出現し得るかと質すであらう。随つて奇蹟なるものは我々が其の或る状態を學んだのであるから、殆んど所謂奇蹟的なるものとなつてをる。そして創造に關する一切の問題は、人間が其の原理を内觀し得ない間は、畢竟依然大なる奇蹟として殘存せねばならぬ。事實は眼前に現はれてゐるが、實際世界の全製造工場を集めても何等一オンスの物だに製造し得ない。そこで、夫れは何か他の方法で製造されたと云ふことを謂ひ得るであらう。有神論の擁護者が恒久的運動の問題を解決する時、有神論を可能ならしむる或る機會が存在することになるのだ、又有神論者が如何に小なるものとは言へ、何ものかを無より作つた時にも、彼等の理論を證據立てる如き機會が與へられるのである。夫故、其の時迄は、彼等の何處に於ても感ずる恒久的動力が其を然らしむる原因を有たねばならぬと云ふこと、及び彼等の何處に於ても觀る創造が創造者を有たねばならぬと云ふ信念を固持せんとする。

今日の科學的假定——最後の説明として提唱される——は多數者を支配しつゝあるのでなく、其は斯る懷疑主義がすんずん深く進み行く懷疑主義に依つて覆へられると考へられてゐるやうである。上古の自然主義の如く「アトラスの肩」と云ふ假定に依つて地球が支へ上げられてをると説いた者は何ものがアトラス自身を立たしめてをるか、と問ふ懷疑主義に依つて顛覆されて終つた。デモクリトス自りライブニッツに至る原子論は未だ曾つて根本的難問に觸れなかつたし、力の支持」と云ふ假定にも觸れてをらない。そこで人々は直ちに問ふであらう、「何時其の勢力と能力とを固持すべきか」。多くの遠き昔の哲學者輩が考へた如く、第一原因が當初に於て宇宙を創造し、次に其の宇宙を其自らの發展に委ねたと云ふことが眞にもせよ、嘘にもせよ、我々が科學と關係を有する限り、第一原因は存在しなればならないと云ふことが以前同様正に歴然として殘存してをる。

水淵に天使が降下したと云ふ如き新しき認識に依つて起つた思想界の動亂が過ぎ去る時、宗教的に發育した人類は力を得たのである。眞理は眞理にとつて何の嘘偽もないのだ。夫故、科學は、其が眞實に認識である限り、一切の認識をして、由

らしむる誘導作用より、心意を永久に追ひ出し得ないのである。而して其の最高分掌は人間を眞理に導く事である。

各新發見の後に於て、人間の第一衝動は其の發見を爲す人間固有の聰明を賞讃することである。併し此の事實は、其と發見を可能ならしめたる力を益々讚美すると云ふ意識を間もなく有つに至るのである。論理學は簡單に見えるものが複雑だと知れる時、其論理の組織者を有つてはならなかつたと推論する、そして、其は人々に何等の指導をも與へない。彼等は、機械が込み入つて精密であればある程、其はより多く熟練にして完全なる技手の仕事だと云ふ推定をするのが常例であるから。

聖書の證據を無効にせんとする科學の基督教に及ばず大體の結果に就て、我々は宗教に關する一切の陳述は二個の弱點に従ふと云ふことを記憶せねばならぬ。即ち其は不適合と誤説とである。神は超自然的に神の宗教を人類に開放した、神は風に囁くことを命じた、また神は著作者を自己の筆者とせず自己のペン軸としたのである。併し、一切の聖書の歴史は、神が人道の一般的條件に従ふ人間を通じ

て神自ら表現せんと期待した。而して是等條件の一つは、最も正確ではあるが半ば現はれ半ば隠くれたる凡べての語の内に眞理が存在すると云ふことである。若し

妙なる歌を聞きし

されど聞こえざる歌は

夫れよりも遙に妙なり

と云ふ詩の語を一つ残らず用ふるとも、思想なるものは、其が言葉の形を採るや否や、唯だ半ばしか現はれてゐない。斯くて聖書は了解を以て讀まねばならぬ、即ち神の心意は残す所なく完全に表はされる筈がない、夫れは神の心意が言ひ盡し得ず唯だ諷刺に止まるからである。

蓋し神の語が完全に表現され得るとしても、其は動もすれば誤つて説かれるのである。神は自己の所信を書くとも、夫れを讀む者は人間である。而して人間は事實を正しく讀まず、また事實に非ざる言葉の意味を讀まんとする、是れが人間の陥り易い危険なのである。科學の教と聖書の教とに存する諸の不同は此等二個

の誤謬の原因の一つより生ずる。而して其は殊に後者より生ずるのである。再三再四、或る科學上の大発見は明らかに聖書に反逆して居ると信せられた。そこで、教會は戰慄し、発見者は恐怖に満ちたのである。併し、間もなく其の誤謬が聖書の意味せざる言葉を自分勝手に讀むと云ふ所から生じた事が判明した。今や吾々の信仰は、教會をして一度び聖書の言葉と相容れざるものと思はしめたコペルニクス派の思想體系を我々が信ずるとも、何等弱められず、またウエスレイの思想をして聖書に現はれたる真理の主要なる部分と做したる魔術を我々凡べての者が信せずとも、吾々の信仰は毫も動かないのである。斯して終に時代の精神は聖書を自然哲學へ導く案内者として使用することを信賴せず、唯だ如實の宗教へ導く案内者として使用することを受認するに至つた。斯の如く聖書を受認することに對して、科學は何等の障礙をも與へないのである。

夫故、却つて科學は聖書の概念に其の完全性と美とを戻與しつゝあるのだ。我々が干渉しない限り、人道の自然的傾向は神性と不規則なるものをのみ結合せんとする。之れに由つて神は單に神以外の何ものも知られざる場合に一個の原

因とされる(例へば多くの神の教へより引用されたる法則の味方となすが如きもの)。然れど科學は世界を一個の機械とせず、一個の有機體として表示することに依り、神性を追求せずして其を普遍的にしつゝある。夫故、科學は神の全存在に關する聖書の宣言を辯護しつゝあるのだ。或る意味に於て、心意と事由とが正反對の兩極を示すが如く、相對的に論せらるゝ科學と絕對的に論せらるゝ宗教とが相反作用を爲すと云ふことは眞であるかも知れない。併し廣い意味に於ては此等二個のものは互に補ひ合ふてゐるのである。と言ふのは科學が我等其自らの外側に全能の力が存在せねばならぬと教へるのに、宗教は此の全能の力は吾等の父であること教へるからである。斯くて、科學は、宗教が「若し汝、汝の全心情を以て眞に我を求めんか、汝は正しく我を發見すべし」と告げる所の必要を我々に感せしめつゝある宗教の先驅者である。

科學は自然を「神の生き衣」として論ずることに依り、宗教を現世の避難所へ伴れ返しつゝあるのだ、併し、人間は其の避難所から宗教を追ひ出さんとする。人類に傳へられた全ての罪惡の中最も強く且つ最も廣く行き亘つて居る罪惡は恐ら

く迷信であらう。而して此れは現世を重せざる傾向の内に其自らを表示し、次に善く行爲せんがための單なる手段と做す傾向の内に自己を表示してゐる。何ものも此の事實に反對し得ないのは、恰かも自然の美を恒に高めつゝある宗教の精神に反對し得ないと殆ど同様である。

哲學に就て考へる場合、哲學が神の存在を假定せずして心的及び道德的現象を認むる限り、其は一般に宗教に敵對するのである。哲學が聖書を不合理なるものと認むる以上、特に宗教と相容れないのである。

哲學の體系は殆んど多數のものを處理し得ず、反省は多數者の行爲に何等の感化を及ぼさない、と考へられるかも知れない。政治學に於ても長期間に亘れる國民の幾多の行動は僅か二三の理想のために跡附けられてをるに過ぎないとも考へられる。夫故其等の行動を眞實支配するものは君主でも政治家でもなく思想家である。宗教上同様な意味に於て宗教運動は終局一般に勢力を及ぼし得る意見を發表する人々から醸されるのである。斯る意見は其の數概ね僅少である。同様に此等の意見は一定の題目に關して屢々唯だ一個の一般的起原を有するに

過ぎない。此れは宗教に關する場合である。若し、我々が多數者に讀まれる時代の特殊文學に於ける又彼等が耳を傾ける懷疑的講述に於ける議論を檢味するならば、我々は此等凡べての議論が元來哲學者輩に依つて考へられた二三の理論に基いて跡附けられ得ると云ふことを發見するのである。而して此等の理論は順次交る代る單一なる誘導作用に大部分基くのである。現在の關係に於て我々をして思考せしめる此の種の誘導作用は即ち所謂經驗哲學體系と稱ばれるものである。

此の體系は一切の心的及び道德的現象を經驗に歸するのである。而して此の經驗は夫等の能動的原因とされるのみならず夫等の始原と考へられてゐる。例へば、兒童が生來の愛情に由らず、愉快なる感情が其れに適應せる觀念聯合を決定し、且つ我々の愛と稱ぶ所の感情を生ずると云ふ理由に依つて、其の母を愛するやうになる如きものである。

疑も無く宗教的觀察は哲學が一般に受け容れられんとするに、甚だ理解され難いやうに思はれる。確かに本務の標準は我々人間の權限外に存在する意思に於

てか、夫れども我々人間固有の意思に於て認識されねばならぬ。若し、斯る外部的意思即ち神が存在せざれば、善とは唯だ人々が終局最も愉快とするものの意味に過ぎず、又、正義とは人々が此の善を保障するに最も有効と認むるものの意味に過ぎなくなるのである。随つて宗教は其の正しき意味に於て、行動の主配者として存在し、又行動を支配するものとしての啓蒙的自利を以て置き換へられなければならぬ。

然し將來の民主制は該哲學の原理を殆ど受け容れんとするか。現在の状態では、確實に回答せんとするやうに思はれるけれ共、我々は哲學を以てしても、潮に於けるが如く、干潮と同時に上潮が伴ふと云ふことを記憶せねばならない。若し、斯る潮が到來するならば、最初に何か新らしき潮か非常なる速力を以て來る。併し、其は要するに真理の潮流線に歸らねばならぬ。斯くて民主制が、設令心的及び道徳的現象を以て進歩の結果と認むるも、經驗活動の理由が存在せねばならぬと云ふことを考へ始める時に、其は真理の潮流線に到達するのである。

多數者の真理は吾等の個人的經驗に依つて確定され、終局人類の集合的立證に

依つて承認されるのである。夫故、人間の理想は宗教の理想と一致し、宗教の方法は其の理想を實現する唯一の方法であると云ふことが認識されて來る。

併し、要するに、我々は政治的障礙に逢著せねばならない。其の主なる障礙は宗教的理想と政治的發達とが調和されず、教會の感化が政治的自由に反對すると云ふことに歸せられる。

先づ第一、政治的進歩が民主的發展を意味するならば、其處に宗教と調和しないものが存在せねばならぬ。一切の宗教及び特に基督教は服従を要求する君主制の上に建設されるのに、民主制は自治を内容とするのである。併し、民主制の意味する自治は絶對なるものではあり得ない。と言ふのは民主制が幾多の不動なる自然法則に物質的にも道徳的に従ふと云ふ理由に依つて實行されなければ、其は唯だ困苦に陥る運命を有するに過ぎなくなるからである。如何なる國民も、一切の議會條令に依りて數學又は引力の法則より其自らを自由にし得ないやうに、人は個人及び團體の確固なる幸福に必要な多くの原則に對する服従の必然より免れることを得ないのである。併し、優良に變形されたる自治は宗教特に基督教

に依つて供給される所のものである。神は公明に、彼等イスラエルの子孫が神の意思を構成し、彼等が富まんと欲して従ふべき原則を彼等に宣言した。然し、神は其の服従に就ては彼等の欲する儘に委したのである。同様に神は彼等イスラエルの子孫が、王を戴くことに就ても、彼等が其の服従を決心した時にのみ、援助したのである。されば、宗教は永久的幸福を確保せしむる諸條件を知らしむることになるが、其等を受容し、拒絶する事はすべての人々の自由に委ねるのである。即ち、宗教は道を示すが、すべての人々に對して、其の道を行かねばならぬとは告げない。換言すれば、宗教は強制を好まないものである。斯くて民主制と宗教とは同一企圖の上に働くのである。何となれば、兩者は自治を許すからである。

然れども、義務に係はる宗教は權利に係はる政治に逆らはねばならぬと謂はれてをる。蓋し、權利と義務とは常に相關的であらねばならぬと云ふことが示めされる。如何なる私人も、他の私人が正當なる義務を果さなければ、權利を獲得し得ないのである。義務を伴はざる權利は何ものをも買へない金錢の如うなものである。

我々が政治的發達の根源であると云はれてをる所の此等權利なるものを檢味せんとする時に、我々は宗教の是認を離れて安定なる存在はないと云ふことを發見する。

而して社會的支配に對する二個の要求即ち權力と正義とが存在し得る。權力は正義が十分に拮抗するに足る力を有せざれば横暴を極めねばならなくなる。然し正義は其が宗教の上に安立する時に力を所有し得るのである。夫故義務一切の十分なる力が與へられ得る、自然の事業を吾々の眼前に横たへることに於て科學は力の全能性を知らしめる、又心意の作用を分析することに於て哲學は自利の動機より離れ得ない。乍併、力と自利とは調和し得ざる強力の暴君を意味し、一切の眞なる民主的理想に反對する。其處で我々は民主制の權利に對する基礎を他に求めねばならない。此は宗教の動力に於て見出され得る。之を他にしては力に依つて強制されざる一切の人が斯の權利を信頼し將た承認すべき何等の理由をも與へられない。

悲しいかな以前存在せし苦難及び腐敗を通じて、今や人の權利は屢々神の權利

と相容れざるものだと云ふことが謂はれて居る。夫故民主制の眞の味方と自身に考へて居る多くの人々は宗教に反対し將た些くとも宗教に對して無頓着である。然れど、佛蘭西革命の状態に於て發生せし如き觀念は結局消滅せねばならない。随つて民主制と云ふ概念は基督教を離れて何等の保證をも有しなせねば、推定の上に基礎附けられて居ると云ふことが凡べての人々に明らかにならぬのである。一切の政治的自由は我々が我々國民に對して義務を有すると云ふ信條に頼つてをる。而して此の信條は我々が宗教に負ふてゐることである。凡べての民主的自由は凡ての人々が我々同胞國民であると云ふ信條に頼つて居る而して此の信條は基督教に負ふてゐる。されば宗教は常に政治的發達の眞の母であるのみならず、政治的進歩の眞の母として殘存せねばならぬ。

教會の勢力は政治的自由に反對して來たと云ふことは眞實でない。此の印象は教會の役人及び幾多の僧侶が人民の自由及び權能を擴大せし幾多の法律的變動に個人的に反對したと云ふ理由に依つて現はれた。乍併一個の大なる制度を判斷せんとせば、我々は其の制度の下に存在する分子の行爲でなく、其の制度の一

般的勢力を觀察せねばならぬ。我々が此の觀察を爲す時、此の時代精神に對して現はれ來る過誤は無意味に歸する。

一切の時代に於て、我々は基督教の誕生自り今日に至る迄に基督教は人民の政治的條件を改善せし一切の感化力中最も力有りしものだと云ふことを發見する。有史以前何處に於ても何等妨げられず、統括せし一個の單なる暴力に依る帝國主義を弱めたものは何であつたか、又凡べての古代文明一切の中心事實たり且つ基督教の感化が及んで居ない所に現在何等かの形を以て行はれて居る奴隸制度の慣習を根絶せしものは何であつたか。

我々が基督教會を観る時に此の宗教が羅馬帝國の滅亡せんとするに當つて、人類を正に野蠻主義に陥らんとすることより救済したと云ふことを發見する。更に又其の宗教は封建制度の殘酷を除きしのみならず之れよりして我に現代の政治的秩序を發展したと云ふことか了解される。宗教が誓を得し度毎に教會は何處に於ても支配者と人民との仲介者として存在した。而して夫れは新しき責任觀念を以て支配者を獎勵し且つ權能を適當に用ふることに依つて人民を教育し



たのである。「マグナカルタ」の目録に與へられたる最初の名稱は英國が教會に政治的に負ふ所多かりしと云ふことの印である。

我々が如何に政治的進歩が商業の發達に密接なる關係を有せしかを反省する時、特殊の責任觀念が増進する。また、商業の發達力が如何に教會の活動に依りて多大の感化を受けたかを顧る時、さらに該の責任の意味を考へさせられる。現在、權力を有する階級は昔時の共和國に於ては、政治的將た社會的地位を有しなかつた。通商は一般的に遮斷された。然るに、凡べての勞働を墮落せしめた奴隸制度は中産階級の勃興の内に消へ入つたのである。夫故、聰明なるアウグスタスさへ、元老が實業界に關係したと云ふので、遂に元老に死刑の宣告を下すに至つた。政治的自由の乳母たりし大都市は修道院より發生した。また、産業は教説より始まつたのみならず、修道者の地位を得、其を基督教の建設者の如く認むることに依つて勞働を高尙にしたのである。

幾多異なる國民を交へて、文化に多大の影響を與へた十字軍は新しき要求を作り、舊き頑迷を去り、人類同胞と云ふ感情を生じた。

斯の如くに鼓吹されたる産業からして、外交なるものが生じた。伊太利共和國より發したコンサルなるものは、其の當初、商業上の利益の擁護者に過ぎなかつた。

併し、以之、唯だ英國の範圍に止まるものとしても、宗教の支配力は着々として政治的自由に恩惠を與へたことを知るのである。夫故、宗教擁護者の失策は殆ど均衡を保てる塵はどのものに過ぎない。

教會は幾世紀の間、單に弱者を擁護せしのみならず、困苦の人々を除去せんとして來た。何づれの代にも貧者は常に存在する。奇異なる、理論的矛盾に依れば、財富が増加すると共に、人口は夫れに比例して増加するやうに思はれる。其の理由は人間は分配し得るよりも多く生産し得ると云ふに在る。英國救貧法は貧民の救済を外すして他の者に委ねられた。確に、此等の企圖は成功しなかつたので、以前勞働して居た人々の事を容易に忘れることが出來た。高山の頂に住み、旅人の保護に一身を捧げ、雪に凍へ死ぬ人々を懸命に救はんとせし、修道僧達は、幾星霜貧者の爲めに教會が努力した美しき典型である。然るに、多くの人は教會を無視せんとしつゝある。其の一理由として、宗教は教義と儀式にのみ拘泥して自己の

犠牲と愛の役目を忘却すると言はれる。盗人の仲間に淪落せる人は、若し、彼が小屋に運ばれず、教會に神への務を果しに行られるとも、感謝の念を殆ど起す由もない。當時教會は禮拜の殿堂たりしのみならず、救護所となつてゐた。そして、其の事は常に貧者や困苦者の訪づれのために開放されてゐたのである。

今より約四十年前、貧救法の規定は非常に困難を覺る貧民の苦は層一層激しくなるの趣を呈せんとしてゐた。尤も教會管區制は相當多くの人々に慰安と救助を與へるのではなかつた。過去に於て、教會が爲した事を考へる際、我々は、教會が全く貧民を保護せし時、現存制度をして自重心を根絶し、貧困を世襲的職業とせしめたる或る弊害を教會が除去したと云ふことを忘却してはならぬ。

前掲説き來りし結論として。我々は、デモクラシーをして、科學が宗教の必然的なることを示し、哲學が宗教の合理的なることを示すので、政治は、宗教の進歩、自由、の保護等の基礎として要求することを考へせしむべく期待するのである。

併し民主制は凡べて此の事を考慮せんとするが、尙ほ宗教より遙か離れて存在してゐるかも知れない。と言ふのは、宗教は知識の問題よりも、寧ろ心情の問題だ

からである。宗教に依つて咎められる惡き思想は心情より生じて來る。同時に宗教に對して必要なる善き思想も心情より生じて來なければならぬ。教會は常に第一に重要な意見を考へんとしつゝある。何となれば、其は正しく行動するよりも、正しく考へることは容易だからである。然れど、斯る一切の迷信は宗教は主に心の問題であると云ふことに面接することに於て我々を盲目にし得ない。如何なる宗教も斯く考へられる前に、心に關する二個の問題が必然的に考へられねばならぬ。其の中の一つは、宗教の要求が感せられねばならぬと云ふこと、他は與へられたる宗教は其の要求を充たすべく感せられねばならぬと云ふことである。夫故、宗教に對する將來の民主制の一般的態度を先見せんとする事に於て、我々は宗教なるものが先天的に非理性的であるか否かを考へるのみならず、多くの人には宗教を求めんとするの感情を有するか否かを考へねばならぬ。

傳來宗教に於ける信仰と云ふが如きものは、些くとも現代生活に於て生活の餘裕を持たざる人或は物質的生活に心を苦しめる必要無き輩の到底思ひ及ばない所である。けれ共、一度び人間性を反省して人生は果して信仰なくして文化し得

るか考へる時、確に人間は何等かの形に於て信仰を所有してをると謂はねばならぬ。即ち一切の人間生活の統一的方面は悉く宗教的権限に屬してをると謂つて可い。されば、殊に政治生活を眺むる時、其の政治生活も、宗教と無關係にして成立することを得ない、是れは、あながち過去の歴史を引合に出さずとも、純論理的に斯く在る可きものでなければならぬ、或る者は生活の苦難又は恐怖を以て宗教の存在を認め、其の慰安に對する憧憬の感情とし、此の宗教なるものを全く非理性的に取扱つたけれ共、私を以てすれば、宗教の内容は何處までも理性的であらねばならぬと思ふのである。また、其の内容が理性的であればこそ、生活内に確實性を把持して最高理想の體現を作し得るのである。斯くて宗教が全生活の統一原理と考へらるる時、民主制も亦宗教の統一性を加味せずしては自覺の體系を作し得ないと云ふことになるのである。殊に卑近なる例を採り、一言以て盡さは西洋に於ける宗教と政治、東洋に於ける宗教と政治、是等の間に不離の關係の存在することに依つて、民主制のみが單り獨存して、宗教と無關係なる態度を持し得ないのは餘に明かであらねばならぬ。

## 九 カントと人類の結合

歴史の諸相に鑑み、聊か歴史の意義を追考し、爾來把持し來れる歴史の先驗的論究に對する興味を刺戟され、「普遍念の修正」に多大の資を與ふるものと惟ひし所からカントの物せる「理性の歴史」なるものを「法律及政治」に紹介した。然るに近時幸にもカントの法律思想、社會思想、將た平和思想等に關する研究が續々發表されるやうになつて來たのを物鬱なる霧の都にて知りし折、善い氣持になつた。んどす私の物せる名の如き企圖は此刺戟の衝動に依ると謂つても可い位である。

カントは近代思想の大洗濯屋であつた。彼は傳來思想の垢を落して夫れに人間の味をつけた。而して其の味は自然科學と云ふ製造所に原料を仰ぎ、而かも自

然科學を超越した所に製せられた。されば、カントの思想とし言はゞ自然科學に無關係なるものと思つてはならない。寧ろ其は實に自然科學に可能性を與へつゝあるのだ。殊に法律思想、社會思想、平和思想などが、如何に彼の天文學研究に源泉されてゐるかを知らるに及んで、世の一般的觀察を新たにする所が在らねばならぬ。例へば *Bestenit Himmel* より *moralische Gesetz* に至る課程を考察すれば、轉た驚異に價するであらう。

カントは死んだけれども斯うして彼は時代時代の人間に依り記念されて行くとして、彼の思想は不滅の力を以て、ずんずん延びて行くのだ。我々はカントに還るに非ずして、カント趣きつゝあるのか知らん。

終に此の企圖がエフ、エス、マーザインと云ふ餘り世に騒がれない人に負ふ所甚大なることを記し、氏に對する感謝と紀念とに代へる次第である。

#### 所 求

一九二四年四月二十二日、一大國際的友朋はケーニヒベルヒに於て、全時代を通じて、最も偉大にして且つ世界的思想家の一人たるカントの誕生を紀念すべく二百

年祭を祝福した。實にカント程一切の民族より導出されたる要素を結合せし思想家は近代に於て無いのである。彼の名をCを以て綴りし彼の祖父はスコットランドより移住したのである。彼を動かせし主なる智的感化は、科學に於ては Newton と Wright of Durham、哲學に於ては Hume、政治に於ては Rousseau であつた。

彼は言語と思想の形式に於て獨逸人であつたが、藝術に比較的無感覺なることに於ては獨逸人でなかつた。更に彼は Goethe と云ふ偉大なる時代の型像を取り巻く熱誠及び情緒からも亦遠ざかつて居た。彼は純粹理性に生き、希望に生き、人道に生きたのである。

我々は彼が豫見せし聯盟の有効なる働きの第五年に於て、カントを國際聯盟の最も合理的なる豫言者として考へつゝあるのだ。彼は同胞結合の概念、實在に頗る近接せる概念、及び數理天文學の範圍に於ける最も單純に知られてをる法則より出發せし徹底的理論の指導に到達し、進んで、人類活動の範圍に於て適應する秩序を要求し續けた。有名なる對比——我の上にては星ある天、我の内にては道徳法なる句は大なる絶叫よりも優れるものである。其は彼の心意の本調子

である。其處に我等の全思想界に於ける範が在る。其は物質的且つ機械的なるものより生活體及び人間に至るのである。其は我等の理性に受け容れられ、また心意最高の分掌は理性の探究に歸する。此の目的は人類の結合てふ理想を實現することであり、且つ遂に恒久平和を來たすべき國家の人類は理性に依つて解説される如き「自然」に依つて明らかに運命付けられたる社會に於ける一切の權能及び幸福を享有し得るであらう。

最優なる圖像として Dante の *De Monarchia* が喚び起される。是等二個の大思想家の心意には甚だ共通する所が多い。ダンテはカントが近代活動の目的として將來を企圖せると同一形式に於て多く中世の理想を要考した。然し、彼等には一大差異が存する。ダンテは教會と帝國の組織に於て理想的國家なるものを既に與へられたる現世の神の現實的在在と考へる。カントは國家を眞實に努力の對象、永き苦難の旅の目的地として考へる。而して其は宗教的制度の玉冠に非ず、實に自治にして且つ共和國に内的關係を有つ近代組織の王冠である。此の點に於て、兎に角カントは近代の大思想家の第一人者である。また彼は科學及び哲學に

於けると同様、政治に於ても我々と同時代の人物であると謂ひ得る。彼の追考は物理學に始まり、次いで數學に及んだ。而して數學は彼の根本組織となつた。彼が二十三歳であつた時、即ち一七四七年に公表した最初の出版に於て、彼は純粹數學たる心の銳利と均衡力の正しき表現形式とを論じた。第二期に入つて、彼は純粹數學を越へて、天文器械學を研究した。是れは一七五四年の事で、ベルリン學會が地軸に據る地球の運動は幾分其の速度の變更を示せしや否やに關するカントの論文に對する賞を捧げた當時である。彼は其の論文をベルリン學會に送らずして、ケーニヒルベルヒの雜誌に發表した。満潮になる時の月の運動は地球の僅少なる速度減少に因ること及び月の常に同一面を地球に對して示しつゝある事が同一原因に、基くことを論じた。最初の公表は、夫れが始めてであつた。前者の理論はカントの他の偉大なる思想の如く、彼の先驗原理を無視する後代の思想家に依つて説明された。

此の論文は天體論なる一七五五年の大著の序説に過ぎなかつた。此の論文に於て、彼は自らニュウトンの價值ある繼承者であり、或る點ではラブラースの優秀

なる先行者であることを表示した。此の著に就き、彼はトーマス、ライト、オブ、ダラムに刺戟された。其は恰もヒュームが純粹理性批判の企圖を促した如くである。一七五〇年、ライトは自然法に基く *An Original Theory or New Hypothesis of the Universe* を発表した。ライトの思想はニュウトンの引力の法則を所謂恒星の如何に依ると做さんとした。是等は空間に由る散布的偶然に非ずして、或る法則の作用に依り平面に導かれた。"They are closer together, the near we come to the Milky Way, so that of the 2,000 stars which we see with the naked eye, the greater part will be found in a narrow Zone of which the Milky Way is the middle. 此の暗示より論を進めしカントは嚴密ではないが、或るものを星雲説と稱んだ。即ち物質的宇宙は嘗つて分野の最も完全なる状態に於ける事由に充ちしこと及び此の事由は一定の諸點の周圍に存する引力に依り共存的に生來したことが提唱された。而して遠心力に依りまた最初より、成長せうとする群星は斥けられ、殆ど同一の平面と同一方向に於て轉廻したのである。此處で其が後代の思想の先行なることに意を注ぎ、更に注意深く我等現時の論議に就て觀る所があらねばならぬ。曰く、人種の進化に關する

カントの後の説明を以てされたる同一系統の人類に就て、ある。天體の如く、人類も亦、中心に向ひ又中心より離れんとする正反對の力に従ふ、而して、宇宙の秩序及び目的は其の均衡と調和に於て成立する。

一七七〇年以前、カント少壯の時、彼は全く自由の槍兵であつた、夫故、彼は自分の思ふことを講議し且つ書いたのである。また彼がケーニヒベルヒで論理學及び形而上學の講座を受け持つたのも一七七〇年以前のことである、そして此のケーニヒベルヒで、彼は後の著を公表すべく決意した。之れより以前彼は主に物理學の問題を書き且つ論じ續けて居た。而して彼の著は一七七〇年より一七八一年に至る間に著しき傾向を示した。即ち其は純粹理性批判の時代であつた。一七五五年には、彈性及び微妙の事由に關する理論が出た。即ち、エーテルに依つて身體は相互に作用し得ると云ふに在る。熱と光とが此の本體の變形的震動である如く、其は明らかにカント後代の思想の一先行となつた。併し其は電氣と云ふ最も重要な要素を論せざることに於て缺けてゐる。夫れは十八世末葉の發見が現はる前のことであつた。一七五五年と一七五六年の間に、彼は地震の原因に關

する論文を發表した。併し、一七五六年には、風の理論に關する論文を發表した。此の論文に於て、彼は他の思想家と全く獨立に、如何にして地球表面の異なる地帯の多種なる自轉速度に依つて定期風の現象が説明されたかを表示した。彼は全く天文學に興味を保持してゐた。約四十年の後、二七八五年——一七九四年、彼は月に在る火山と氣候に及ぼす月の影響に關する研究を發表した。彼は我々に反面せる月の側に存する諸條件は我々に正面せる月の側に存する諸條件と全く異なること及び月の重心は遙か遠くの側に在らねばならぬことを論じた。彼は亦た既に、後年一七八一年ヘルシエルに依つて發見されたる今一個の遊星即ち現在天王星として知られてゐる星の存在を推定したのである。

一七七〇年には變動が來る、其の時彼はケーニヒベルヒで職に就いた。而して彼は外的觀察と思索に由る思想の大部分を内觀自己省察に、空なる天より道德法に轉じた。而して其は彼の心意の根本的統一に力を與へた。更に其は彼をして自然の全體系の一部としての人生問題に第一の地位を與へしめ又國際政治の立場より世界史の記事に對する行き道を準備せしめた。

一七六六年に出版された、形而上學の夢に依つて説明された、幽靈觀察者の夢と稱ばれた論文は、形而上學の夢に渡る興味深き橋である。其中の一文句は、人類の統一に導かんとする彼の思想の本調子を與へるのである。アリストートルが何處かで曰ふてゐる。若し我々が目を覺して居るならば、我々は共通の世界を享有してゐる。然るに、我々が夢を見てゐる時は、我々は各々其自らを所有して居るのだ。第二の言ひ草は眞である。我々は種々異なる人々の中に在る時、各人は彼自らの世界を所有すると謂ふであらう。其は理論上彼等が夢を見つゝあることを推定せしめるのだ。如何に心意將た靈魂が其自らなればとて、若し彼等が目を覺し且つ聰明であるならば、決定と命令とは彼等すべてに對して同一である。其は、道德法が建てられて後、結局世界の平和と聯合が實現すると云ふ吾々の心的概觀の普遍性に關するものである。

一七七〇年以向、ケーニヒベルヒの論理學及び形而上學教授として、カントは歐洲に於ける最も有名なる哲學者にして且つ近代思想に於ける最も偉大なる力となりし生涯を初めた。彼は益々形而上學に没頭し、彼を廻る現實世界の意識を益

々小にしたのである。記せられたる所に據れば彼は、バルチック海に航行したこともなく、また、ケーニヒベルヒより四十哩以上の所へ旅行したこともなかつた。而して彼は音楽、自然一切の美、將た社會の爽快を餘り氣にかけなかつた。彼が教授時代以後發表されたる十六、七の著は二個三個の著以外の物であつた。而して其の二個三個の著とは一七八一年發表された純粹理性批判を論じ初めて原理の發展を嚴密に解説せんとするものであつた。併し、彼が之れに没頭せし時にも、彼は決して自然科学の興味を失なはなかつた。三個の思想の流が最後まで不可知に進んでゐる。秩序的宇宙の古き信條は數學及び天文學の上に、育ち理性の普遍的命令に關する理論は一切の人類時代の戦争と政治に關する研究とに適應する。カント一切の心意は此の二百年祭に於て、彼が人類に對する生き活きした且つ永久的な興味を有せしものとして見えられてをる。而して全てのもものは互に相關係されてをるのであることが理解される。我々が彼の國際的重要さを祝福しつゝあると同時に、最近の評論家が科學に對して頗る重要な哲學的意見を有せしのみならず、更に、百五十年以前に到達したよりも、夫等の意見がより多く重要

となつてをると我々に語るのは、之れを記して興味がある。エツヂントンには、原子數以外の外的世界の吾々の經驗に於ける一切の要素を我等自らの心的過程に歸せんとするが、其は物其自體の多様性に關するカントの意見の興味ある結論なのである。人は、事實、世界に統一を與へる。一切の相對性理論は心意が其自らの形式を幾多の思考に與へる役目の部分に關するカントの教説から演繹されるであらう。

是れ創成論のカントと國際聯盟のカントとを結合する關節である。人間は普遍的理性的存在にして、其が成長する時、同種の結合を我々が肉體に於て發見する如く、人間の社會進化に與へるのである。一七八四年發表されし國際政治の立場より見たる世界史てふ小論文、是れぞ如上を論せしものである。

廣汎に亘つて行はるゝ人類活動は一切の物理的現象の如く、普遍的自然法則の統制の下に在るのである。若し、我々が人類活動を別々に離して觀るならば、夫等は連絡も無く、法則も無きやうに思はれる。併し、夫等を集合的に取り扱ふ時、夫等は遅々たるものであるが、絶間なき連續的發展を表はすやうに思はれる。例へば出



生、死亡、結婚及び事實一般の社會的現象は正に氣候の振動の如く法則に従ふのである。

The Theory of the Heavens which begins:—

It seems to me that man here on earth can, with intelligent certainty and without presumption, say: Give me matter and I will construct a world out of it, i, e, give me matter and I will show you how a world shall arise out of it. We have matter in existence, endowed with an essential force of attraction. It is not sufficient to determine the causes that may have contributed to the arrangement of the system of the world as a whole. .... But can we boast of the same progress even regarding the lowest plant or insect? Are we in a position to say: Give me matter and I will show you how a caterpillar can be produced. .... The formation of all the heavenly bodies, the cause of their movements, and in short, the origin of the whole present constitution of the Universe, will become intelligible before the production of a single bird or caterpillar by mechanical causes will become distinctly and completely understood.

然し、天體論が書かれて以後、生物並に人間の進化に影響する或る法則が、カント

の上に曙光を放つたのである。其處に、一七八〇年發表された判斷力批判の論が存する。尤も夫れは世界史の記事が現はるる以前のことであつた。

『形式の比喩』は一般的起原より發生せし如く思はれ且つ夫等形式と原本的形式より生ぜし夫等の生産とに於ける現實的關係の豫想を強めるのである。是れ進化論の萌芽にして、其は彼が小論文に於て更論する人類社會に關するものである。カントの訴ふる將來のニュウトン將たケプレルは、人は下等動物の如くに本能の法則にのみ従ふものでないと云ふことを知るであらう。進歩せる思想家輩が人類のために絶えず考へつゝあるが如く、遂行さるべき合理的なる豫定の計畫を人類全體に就て求むるも徒勞である。一目して事實、人類史は人間を、此處彼處智識の偶然的光線を伴ふ愚漢、虛榮、惡爲の集團として記せしを知るに足る。併し、カントは此の導線を何處に見出すであらうか。

其處で、カントは一切の生物活動及び其の性質を説明する一切の生物に對して與へられたる且つ運命附けられたる目的に關する舊きアリストテレスの概念に還るのである。是れは人間に對して如何なる意味を有つか。明らかに、其は人間

理性の完全なる發展である。人間の理性は其の力を本能の範圍を越へ、全く類似せざるものとして現はる機能である。然し、其は程度に従ひ、試験的に且つ、實行に依り、發展される。而して、個人が、人間個人の場合に於て、全過程を遂行するに足る程永く生存しない故に、其は其の持分を各々次の時代に譲り續けて行くために、一組の時代を要求するのである。

人間が此の理性の傳襲を實現するや、直ちに新しき状態に到達される。人間は將來の發展を豫見し得る、而して進歩の觀念が生れる。其は人間が豫見すべき連續的且つ合理的發展に對して必要である。何となれば、進歩は人間の努力に依存するからである。物理的には人間は寧ろ悪く備へられてを、何故ならば、自然の目的とは人間が其の合理的努力に依り艱難なる情形より強いて幸福と保護を獲得すべきことだからである。人間の發展と合理的自尊とは目的であり、此の目的は全人類の協同に依つて保障される。人間は人的には死すべきものであるが、種としては、永存的である。

蓋し、社會進歩の課程は單純且つ直接なるものでない。人間の性は其自ら外部

の世界と同様に争闘性を藏してをる。人間は社交的なるとともに非社交的である。人間は、社會的狀態に於てのみ、眞の性質を認め得ると云ふことを意識するとも、人間は自分自身に争ひ且つ同一なることを爲しつゝある他に抵抗しつゝあるのだ。私人的目的に對する此の競争——金錢、名譽將た地位に於て、文化の第一向上の歩程が現はれ、而かも此の競争に依つて、人間の技能が開放されるのであるが、意思の撰擇の上に建設された道德的結合は人類の場合、其の初の必要に依り、人間の爲さねばならなかつた社會的本務に代はらなければならぬとカントは考へる。人間性の是等明らかなる反對性を認めることに於て、人類最大の勝利が成立するのだ。而してカントは、事實の多種及び反對中に横はれる共通目的を観ることに於て、人間最大の力を示すのである。人は個人的發達のために最大の自由を求め、而して同時に、人間の非社會的傾向を妨止せんがために、最強の社會的強制を必要とする。

我々は社會的強制に反逆する個人的自由の問題より、人間は人間の意思を支配する主人を何處に見出すべきかに移つて考察を進める。併し我々はダンテが何

處に其の主人を見出したかを知つて居る。地上に在る神の二王子であつた、即ち俗界を支配すべき帝王と靈界を支配すべき法王とが夫れである。カントの解決はさう周到でもなく單純でもない。彼は人間の主は人間の中に發見されねばならぬと云ふ推定を以て出發した。彼は完全なる解決を望むは不可能であると曰ふ。何となれば、如何なる最高權力も、其の強權濫用を常に、また確實に防止得べくもないからである。人間が造られるやうに、曲がれる木から絶對に眞直なるものを求めんとしても不可能である。併し、自然は我々に出來るだけ夫れに近づくべく告げる。而して如何なる立派な企圖に對しても、三個の事が要求されるのである。第一は、善き民制とは何であるかに關する正當なる意見。第二は偉大なる經驗。第三は適用される意思。各國家に對して善き一般的制度も完全ではない。我々は之れより多種の國家間に存する關係の條件へと進んで考へねばならぬ。個人が野蠻狀態に於て用ふる個人對個人の無法律なる且つ無統制なる自由と同種の自由に於て、分離せる個々の國家は專横を爲すであらうし又屢專横を爲したのである。然るに、戰爭及び戰爭の一般的結果を通じて、自然は國民を恒に、抽象的

理性の缺くる所無く論せし結合の經驗及び便宜に導くのである。the Abhale. St. Pierre 及びルーサウの如き、斯る意見を迎へて理想主義者輩は、目的は眞實在りしよりも成就の域により近き所に在つたと考へることに於て、樂觀主義者として批評され得るに過ぎない。遂に來なければならぬことは我等存在の必然性である。粗暴なる自由は其が個人に於けると國家に於けるとを問はず、放棄さる可きである。而して平和と安寧とは法律の上に基礎附けられたる一般組織に於て求められる。斯の如き論争事項を人間固性の發展より推定する方が歴史の課程を原子の偶然的會合と看做すよりも確に適當である——其の原子より偶然にも調和的國家が現はれるか將た現はれないかが問題である。我々は生の世界の諸部分に於て働く最終の目的を觀るのであるが、我々は其を極力否認すべきか。

然し、カントは斯る世界聯合は危険を去り得ないと主張する。若し、其の世界聯合が完全に安全であるならば、人類の力は眠るであらう。而して均衡を復興し且つ人間の二個の争鬭的活動性を相互的破壊より防止し得る聯合の内に或る原理が存在す可きであると云ふに足る。併し、此の均衡てふ終局狀態に到達する以前

に、我々は惡弊の奈落と外的繁榮の欺瞞的假象とを見るのである。人間が人間向上の終局的歩程を採るに非ずんば、野蠻狀態は絶壁の上に戰慄しつゝある文明人の狀態よりも好ましきものである。我々は藝術と科學とに於て非常に開拓されて居る。我々は生活の恩惠と儀禮とに無頓着になる迄に開化して居る。然し、道徳化さる可き多くの事が爲さるべく残つてゐる。道徳の觀念は文化の觀念に含まれてゐる、然し其は文化の範圍に於て緊張され、今日一切の勢力を武力に依つて増大せんとする怠惰なる計畫に集注しつゝある國家の活動を包含するまでに伸張することを要求する。

我々は人類の歴史を大體、一般社會組織の完全なる狀態を實現せんために自然の潜められたる計畫を解説するものと看做するのが正當である。彼は、我々は斯る解説一切の跡を觀知し得るかど尋ねる。「或るものは始ど觀察し得ない」と云ふのが其の答である。此の論争は天文學者が太陽及び遊星が天體の中に運行する課程を説明せんがために爲すと同一の論争である。彼は之れに殆ど氣を懸けない、そして彼は全體なるものを推定することに於て正しいのである。

人間史の場合に於て、吾等の興味は未來の遠き時代へ進み行く、而して其の興味は我々自らの智的調整に依り、進歩を速めると云ふ事に依つて増されるのである。現在の狀態は、完全ではないが、望なきものではない。一切の國家は人間的智能に依り凡べて關聯せるが故に、如何なる國家も他の國家に何等の影響をも及ぼすことなくして停止將た退歩するを得ない。若し國民の自由が拘束されるならば、一切の社會活動は病み、國家は、内部的にも外部的關係に於ても弱るのである、却つて、國家は一七八四年カントの書きし如く成長しつゝある。またカントは獨逸に就て、次の戦争に對する勘算がすべての費用を包含せるが故に、獨逸政府は教育に對する自由の金を所有しないと云つた。我々は現代に於て殆ど夫れと同様なる言葉を聞いた。併し、目前に見る如く、機は到來し、社會は向上の道を新たにし初めたのである。而して、戦争の問題は苦痛並に負債を其の結果に於て包含してをるので、争闘に直接利益關係を有せざる政府は、其の役目を媒介者として提供するであらう。斯くて、偉大なる最初の國家なる體現即ち世界的平等の裁決所が過去の歴史一切の先例を越へて現はれるであらう。

當時カントが探究し得た人間の組織に於ける此の運動は今や既存の事實となつた。而して國際聯盟は世界最高の政治的必然性なるのみならず、世界史の目的として見られてをる。そこで、其は人類の普遍的歴史を構成すべき當を得た企圖となる、而して斯る事業は自然眞個の目的の實現に力を添へるであらう。我々は、或る適宜なる目的に適合せしめるならば、人的事項が探らんとする課程なる觀念を以て歴史を物語る時、我々は一個のローマンスを描きつゝあるのだ。社會に於ける當然の目的を推定する時、斯の如き計畫は、人類活動の最も大なる抽象に於ける組織的統一に類似する或ものを跡附けるべき導線を我々に與へるであらう。然らずんば、其は渾沌たる而かも矛盾せる聚合として現はれる。

カントの畫せる最初の寫生文は希臘史より説き起してをる。彼はすべての上古史の有効性を概説保證するやうに思はれる。我々は羅馬帝國の功過と缺陷、及び羅馬帝國を破壊し繼承せし蠻族に與へたる羅馬人の感化——研究は希臘を併呑せし羅馬人に進み行く——に就て研究す可きである。他の諸國は是等二個の啓蒙國の範圍に入る時、吾等の範圍に加入せんとした。西洋史一切の有爲轉變を通じて、

て、文明の萌芽なるものは各革命の際、より多く發展し、未來への健實なる期待を開くのである。

併し、我々は歐洲戰爭及び其の前後を通じて、世界の國々に動亂の勃發せるを見た。或るものは獨立を絶叫し、或るものは共和制の實現を謳歌した。是等の動亂は其の因果法則に於て、國家間の戰爭と何等異なる所がない。やはり人類の血を見なければならぬのだ。我々は斯の如き事を欲しない。カントも獨逸人に向つて非道德を爲せと教へなかつた。けれ共、國家間の利害關係は敢へて之れを爲さしめた。そして被害は一國に止まらず全人類に及んだ、而かも戰爭は勝つも敗けるも、國家の疲弊並びに世界文化の損失を免がれないと云ふことを知つた、若し我々人類が悉く結合の上に立ち得たならば、毫も斯る悲慘を経験しなくても可いであらう。カントは此の人類結合に於て永久平和の相を觀んとした。言を換ふれば、フイヒテの「道德的秩序の世界」スチルナーの「自我の集團」である。然れど、人類は各々其の本性に於て、自利を忘れてゐない。されば、人類は各人相争ふの狀態に在ると云ふのが正しき觀察かも知れない。併し、また一面に於て、若し、自利をのみ人

類が自己存在の原理とするならば、如何にして社會は存在し得るかと考へて來ると、如何にもして、人類に於ける相互扶助性を認めねばならなくなつて來る。茲に於て、若し、自利性と扶助性どが互に對立狀態を維持して進むとすれば、人類の結合を對象とする永久平和なるものも、要するに是等兩反對性の中間を貫通する、調和的過程の内に見出さるべきである。また、若し、扶助性が自利性よりも、より多くの強さを把持せるものとするならば、終局、人類の結合——永久平和——の實現は可能となるべきである。若し、國際聯盟が、自利制限の體現であるとするならば、前者に屬し、若し其が最強の道德的權力體であるとするならば、後者に屬する譯である。併し、現實は戰々競々たるものである。之れを以てすれば、或はカントの「永久平和」はヴインデルバントの評したやうに「平行線の交叉點」かも知れない。平行線の延長は永久に交叉しないのが現實であるが、無限概念に於て交叉するとも考へられる。然れど、夫れは、交叉しないと云ふに殆ど等しい如く、永久平和なるものは實現不能であるかも知れない。けれどもカントの眞意は、开んな事に在るのではなく、全く人類の理想を論及して、現實の不斷の高級化、道德的價値の普遍化を企圖してゐる所に在るのだから、此の點に對する觀察を誤らぬやうにして欲しい。

月見草の朝咲いて、また夕べに咲く  
のは面白い。そして青葉には争は  
れぬ水無月半ばの風が囁いてゐる。

大正十四年六月廿五日印刷  
大正十四年七月一日發行

政治的認識の基礎  
定價參圓貳十錢



有所續版

著 者	發 行 人	印 刷 所
村 瀨 武 比 古	照 井 健 伍	平 凡 社
<small>東京市神田區南神保町九番地</small>	<small>東京市神田區美神保町七番地</small>	<small>東京市神田區美神保町七番地</small>

發行所

東京市神田區  
南神保町九番地

太陽堂書店

振替東京三一七二五番  
電話四谷五七九四番

法學博士 上杉 慎吉 先生 對  
法學博士 美濃 部 達吉 先生

# 最近憲法論

菊 版 上製 箱入  
全一冊 四八五頁  
定價 參圓八十錢  
送料 二十七錢

## 好評八版

本書は我國法學の權威上杉美濃部兩博士が往年雜誌太陽に於いて發表せられた、龍攘虎搏の憲法論が主題となり、之れに配するに、兩博士の論陣に參進せられた我知名公法學者の雄辯を納めたもの。惟ふに國家組織の本源を成す憲法論に於いて、團體、政體、統治權の所在等に關する根本的決定が我憲政の運用と社會組織乃至は思想文化の上に、如何に重大なる波紋を披くかは、今更喋々の辯を要しない。上杉美濃部兩博士其他一般權威の論策は、我憲政有終の美果をして、眞紫なる普遍的原理の上に基礎づけんとする、尊い動起と深い内省から生れたのである。夫丈一般人心に深い印象と一世の視聽を惹くべき貴重なる文字である、苟も國家を思ひ民生の歸趨に心を走する爲政者識者は固より、一般學徒が必誦すべき研究資料として將又絶好の指針として本書を薦めるのである。

## 出版目錄

(太陽堂出版目錄並  
新刊月報 無代進呈)

### 教育・哲學・

文學士 倍賞義雄著 <b>教育の基礎としての論理學</b>	三四版 六六頁 定價二〇五 送料一八〇	最新の論理學說を網羅し眞の教育の仕事に對して直接要求する合理的基礎を與へやうとしたものであつて所謂死骸的形式論理學の書に非ず。
文學士 田花爲雄著 <b>教育の基礎としての心理學</b>	同	個人及集團心理の全般に亘り特に新心理學としての教育に重要視され來れる精神分析學を加へ方便的要求より學的要求に應ぜんとするもの。
文學士 伊藤千眞三著 <b>教育の基礎としての倫理學</b>	同	教育の目的は倫理學に依るべきであると云へる哲人の言の如く、教育學の倫理學に負ふ所の少なからざるを論究し詳説したもの。
文學士 倍賞義雄著 <b>教育の基礎としての哲學</b>	同	初めて哲學の研究に志すもの、及師範學校哲學專攻科などの參考書として最も適當なる書、哲學の研究法、哲學の問題、哲學史の大要、重要哲學說の一斑、最近哲學の傾向等を説き、教育の基礎としての使命を全らしめんとしたもの。
文學士 村田良策著 <b>教育の基礎としての美學</b>	同	美と云ふこと、藝術と云ふ事實が、吾々人生に密接することは疑ひない以上、一般教育の基礎學として美現象とその理論とを解説したもの。



<p>文學士 小原國芳著</p> <p><b>宗教と教育</b></p>	<p>四六版一六〇頁</p> <p>定價一、五〇</p> <p>送料 一二</p>	<p>宗教の本質を論じ更に宗教と諸科學との關係を論じて最後に宗教教育の必要と其方法とに就いて述べたもの</p>
<p>渡部政盛著</p> <p><b>教育學說の論理及其批判</b></p>	<p>四六版四三〇頁</p> <p>定價三、〇〇</p> <p>送料 一八</p>	<p>社會的、個人的、主知的、道德的、美的、宗教的、實際的、國家的、人格的、文化的等、代表的教育學說の概念論理を考究し批判したものに特に文檢受驗者必讀の書。</p>
<p>文學博士 富士川 游著</p> <p><b>異常兒童</b></p>	<p>菊版三〇〇頁</p> <p>定價三、〇〇</p> <p>送料 二一</p>	<p>異常兒童とは何か、原因、身體的狀態より其の療法、教育、取扱等を説き最後に其の社會的保護を論じたものである。教育上裨益する所の廣い研究の結晶である。</p>
<p>文學士 菊地俊諦著</p> <p><b>保護兒童の教育的研究</b></p>	<p>四六版四〇〇頁</p> <p>定價二、五〇</p> <p>送料 一八</p>	<p>保護兒童の研究は現時頗不振の状態にある。著者大いに之を慨し理論並實驗の兩方面より其教育的研究を試みたるもの。</p>
<p>文學博士 桑木嚴翼著</p> <p><b>哲學網要</b></p>	<p>菊版四六〇頁</p> <p>定價三、二〇</p> <p>送料 二一</p>	<p>哲學概論及哲學界現時の諸問題、傾向等を論述して論理整然、批判透徹、斷案明なり、論述の方法また極めて簡明にして何人にも了解し得る良書。</p>
<p>文學士 小熊虎之助著</p> <p><b>心理學十講</b></p>	<p>菊版四五〇頁</p> <p>定價三、八〇</p> <p>送料 二一</p>	<p>心理學の一般基礎的智識の平易にして興味ある系統的敘述、並に實驗、犯罪、應用等各種心理學の大觀及び多數の具體的なる圖解。</p>

<p>渡部政盛著</p> <p><b>學習の原理及其實際</b></p>	<p>菊版六七〇頁</p> <p>定價四、七〇</p> <p>送料 二七</p>	<p>現今教育界の基本問題たる學習及其指導法に就て細大漏さず論述せるものである。我國學習研究の不備は漸く本書に依つて救はれる。</p>
<p>三浦藤 著作</p> <p><b>倫理學說精義</b></p>	<p>菊版四六〇頁</p> <p>定價三、八〇</p> <p>送料 二七</p>	<p>古今東西の代表的倫理學說を最も詳細、的確に批判し其歸着點を明かにしたものに、「倫理史」と「概論」との長所を併有せる良書である。</p>
<p>大政官 翻譯</p> <p><b>日本西教史</b></p>	<p>菊版一、三〇〇頁</p> <p>定價一、二〇〇</p> <p>送料 四五</p>	<p>近 刊</p>
<p>文學士 藤崎 俊茂著</p> <p><b>新獨逸語自修の根抵</b></p>	<p>四六版七五〇頁</p> <p>定價三、五〇</p> <p>送料 二一</p>	<p>獨逸語及佛蘭西語の必要に付いては今更説明を要しないが、從來の參考書は何れも時代遅れの古きもののみである。語學に天才的な著者は大いに之れを遺憾として、新時代の要求を滿し得る最も新式な獨習書を著された即ち本書は之れであつて極めて初歩より高級に進む新式自修書である。</p>
<p>同 著</p> <p><b>新佛語自修の根抵</b></p>	<p>同</p>	<p>同</p>

科學・其他

農學士 大町文術著 近 <b>自然科學十講</b>	菊版五五〇頁 定價四、五〇 送料二七	宇宙進化論、電子論、相對性理論、量子論、放射能元素、膠質化學、遺傳論、生物進化論、內分泌説、免疫血清學、以上十大學説の通俗的説明書。
ダーウキン著・松平道夫譯 全種 <b>の起原</b>	四六版八〇〇頁 定價三、八〇 送料二七	ダーウキンの「種の起原」は何人も必讀すべき世界的名著である。本書は其全譯であつて譯文正確にして流暢また大いに誇とするに足る。
文學博士 佐々政一著 近 <b>世國文學史</b>	菊版三四〇頁 定價三、〇〇 送料二一	近世の國文學に精通した故博士が江戸時代から明治の新文學勃興當時までの文學思潮と各時代の文學者及其の代表的著作の性質を慨説したる殊に六十餘の寫眞が得難きもの。
ニイチエ著・三井信衛譯 <b>この人を見よ</b>	四六版二六〇頁 定價二、〇〇 送料一八	全能の神すらも人類に向つて頽廢と衰亡とを與へる弱者だと叫んだ彼ニイチエの思想を最も分り易く述べたもの、譯文流暢。
ルソー著・内山賢次譯 <b>人間不平等起原論</b>	四六版二六〇頁 定價二、〇〇 送料一八	本書に譯收したる二篇、何れもルソーが世界の思想界に動かさる地位を得たものでルソーを知らんとする者の必讀の書である。人間不平等起原論及學藝論を收む。
法學博士 上杉 慎吉對 法學博士 美濃部 達吉 <b>最近憲法論</b>	菊版四八〇頁 定價三、八〇 送料二七	兩博士の帝國憲法大論戰の論文全部と之に對する各大家の賛否批評を集めたもの、研究家の見逃すべからざる重要な書物。

工業

英國工學士 關口定伸著 理論及 <b>電氣學精義</b> 實驗	菊版七五〇頁 定價五、八〇 送料二七	電磁氣の成因、動作、應用、測定、並に靜動電氣に関する機械器具等、四百餘の圖に依り何人にも解し得る様述べた類書中最も新しく分り易き良書。
同 著 和英 <b>電氣用語辭典</b>	三六版三八〇頁 定價二、三〇 送料一八	最近の有ゆる用語を網羅し、英和和英何れよりも引用自由自在、用語には一々明快な發音と解釋とを加へたもの、附録として仕様書、見積書等の作り方を示す。
工學士 齋藤 信著 <b>瓦斯倫自動車</b>	菊版五〇〇頁 定價五、〇〇 送料二七	瓦斯倫自動車の理論構造及び設計に就いて論じたる書にして、流暢なる行文と數百の挿圖と相俟つて最も容易に理解するを得る類書中の白眉。
工學士 原田 梧樓著 <b>染料藥品製造法</b>	菊版六五〇頁 定價七、五〇 送料二七	染料中間藥品全般に涉り其製造の基礎的理論と其運用方法とを懇説して染料製造當業者當面の問題に最もよく答へた最も分りよき良書。
理學士 柵山茂三郎著 <b>色素化學汎論前編</b>	菊版四八〇頁 定價五、五〇 送料二七	<b>國民新聞評</b> ：本書は色素化學に就いて洩さず詳説したもので化學者染料學者などに取上り此上なき好參考となるであらう。
同 <b>同</b>	菊版貳六〇頁 定價三、〇〇 送料二一	前編。ダイアノ化合物、色素中間體、色素製造篇、色素構造篇、醫藥色の染料。 續編。染色原論、色素分析篇、中間體と其誘導體及び色素、天然色素、礦物性色素、附録。

<p>英國工學士 關口定伸著 近趣味の電氣學</p>	<p>菊版 三三〇頁 定價 三、〇〇 送料 二一</p>	<p>本書は極めて分り易く最も興味ある筆に依つて電氣に關する有りと有ゆる知識を面白く讀み行く内知らず知らず會得せしむる様う説きたるもの、廣く家庭の人々にも薦む。</p>
<p>松平道夫著 近趣味の發明界<small>(一名、現代文明の概論)</small></p>	<p>菊版 三六〇頁 定價 三、五〇 送料 二一</p>	<p>國民新聞評：鐵道の沿革、電車、自動車、高速鐵道、地下鐵道、船舶の今昔、コンクリート船、潜水船、飛行機、飛行船、壓搾空氣の利用、無線電信、電話、電燈、電熱、印刷術、特種放射線、顯微鏡、其他現代文明を築き上げた有らゆる發明發見を網羅し寫真圖畫人々で何でも解り易く簡明に記述した者で科學知識を家庭に供給する良書。</p>
<p>同 著 同 <small>(日常機械器具篇)</small></p>	<p>同</p>	<p>大阪毎日評：時計、蓄音機、樂器、農業機具、消火器具、他趣味を中心とする日常用具の研究であつて挿繪の豊富なるがうれし。附録として工作、製造、運搬、織物、編物、紡績に關する諸機械の一般紹介があり甚だ有益である。</p>
<p>同 著 近趣味の化學工業</p>	<p>菊版 三三〇頁 定價 三、五〇 送料 二一</p>	<p>國民新聞評：一般人士の化學的常識涵養に資したもので理論に越らず學ぶもの、興味を喚起するに努め寫真圖解も多く掲げて親切ならしむるなど廣く江湖に推奨するに堪へたるものがある。</p>
<p>各務忠方著 タイプライターの構造の使ひ方</p>	<p>興版 大二三〇頁 定價 一、八〇 送料 一五</p>	<p>タイプライターの種類から機械の構造、之の取扱ひ方手入法等は勿論タイプライティング練習の要領等を詳説したものの寫眞及凸版四十餘を添ふ。</p>
<p>東京高等工藝學校 教授 森谷延雄著 これからの室内裝飾</p>	<p>菊版 四五〇頁 定價 四、〇〇 送料 二七</p>	<p>近 刊</p>

終